

第2章 神戸市の概要

第1節 神戸市の自然・地理的環境

1-1 位置

神戸市は兵庫県の南東部に位置し、市域は東西約 36km、南北約 30km で、総面積は約 557km² を測る。神戸市と隣接する市町として、東側に芦屋市・西宮市、北側に宝塚市・三田市・三木市、西側に稲美町・明石市がある。市中央部にある六甲山系（最高峰標高 931m）の山並みによって南北に隔てられ、南側は大阪湾に面している。北側は、内陸部となり丘陵地が広がっている。このことは文化や産業などの成立や発展にも大きな影響を与えてきた。なお、明治時代以前の国名でいうと、摂津国と播磨国の一部にあたり、その境界は現在の須磨区にあったとされており、古代から様々な歴史や物語の舞台にもなっている。

関西では神戸市、大阪市、京都市の3都市を中心とした大都市圏が形成されている。神戸市はこれら3都市の中で西側に位置している。



図5 神戸市の位置(左)と行政区界(右)

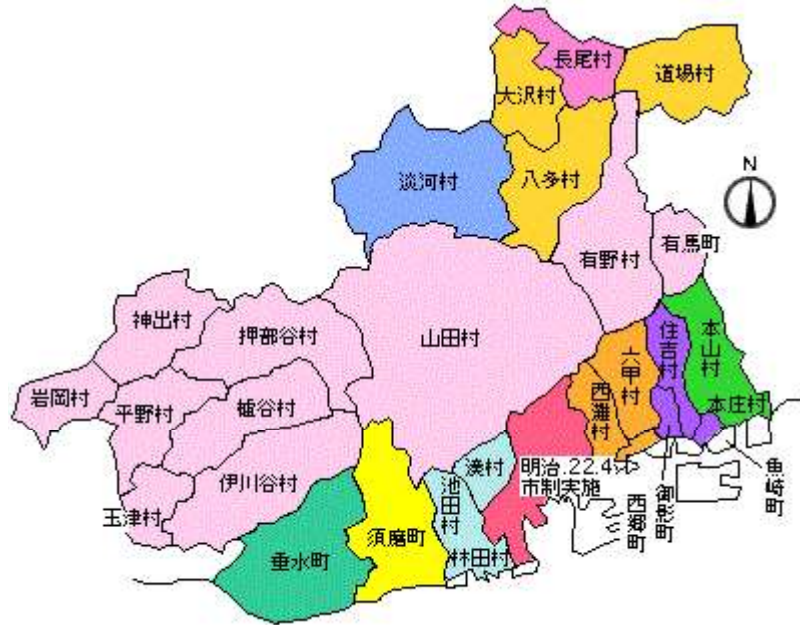
(白地図出典：国土地理院 地理院タイル (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>))

1-2 行政区の変遷

神戸市は、明治22年(1889)4月の市制町村制施行によって誕生した。発足当時の神戸市は、神戸区、荒田村、葺合村の区域(現在の中央区と兵庫区の一部)のみで、面積21.28km²と小規模であった。その後、東西に位置する西灘村や須磨町などの編入を経て、昭和6年(1931)9月1日に区制が施行された。六甲山系以南にある灘区、葺合区、神戸区、湊東区、湊西区、湊区、林田区、須磨区の8区が設置された。戦後、昭和22年(1947)には六甲山系以北にある有馬町や西側に位置する伊川谷村など10か町村が編入し、昭和25年(1950)には臨海部東側の御影町、魚崎町、住吉村など周辺町村の編入を経て、昭和33年(1958)の淡河村の編入により、現在の神戸市域がほぼできあがった。その後はポートアイランド、六甲アイランドなどの臨海部の埋め立てにより面積は広がっている。

神戸市は指定都市制度運用開始の昭和31年(1956)から政令指定都市であり、これ以降高度経済成

長期に突入し、大規模な都市開発が進められた。現在は9区の行政区（東灘区、灘区、中央区、兵庫区、北区、長田区、須磨区、垂水区、西区）で構成されている。



凡 例			
明治 22 年(1889) 4 月 1 日 21.28km ²	昭和 4 年(1929) 4 月 1 日 83.06 km ²	昭和 25 年(1950) 4 月 1 日 404.66km ²	昭和 30 年(1955) 10 月 15 日 492.60 km ²
明治 29 年(1896) 4 月 1 日 37.02 km ²	昭和 16 年(1941) 7 月 1 日 115.05km ²	昭和 25 年(1950) 10 月 10 日 420.64km ²	昭和 33 年(1958) 2 月 1 日 529.58 km ²
大正 9 年(1920) 4 月 1 日 63.58 km ²	昭和 22 年(1947) 3 月 1 日 390.50km ²	昭和 26 年(1951) 7 月 1 日 479.88 km ²	埋立地

図 6 神戸市域の変遷（出典：神戸市 HP）

1-3 地形

神戸市域の地形は六甲山系によって隔てられ、南北で様相が異なっている。南側の六甲山系南麓地域は、山側から扇状地、海岸低地、埋立地などが続く地形となっている。北側及び西側の北部・西部地域は、たいしゃくさん たんじょうさん 帝釈山・丹生山系を中央にして、丘陵地が波状に広がっている。六甲山系は西側へいくほど高度を下げ、須磨付近で海岸部にあたり、その西側は緩やかな丘陵地や台地につながっている。

高度経済成長期以降、六甲山系の土砂で臨海部の埋め立てを行うとともに、土砂の採取地を新たな街として造成する開発（神戸の開発手法「山、海へ行く」）が行われた経緯があり、神戸市の地形はそれに伴い大きく変容している。

山と海の距離が短い六甲山系南麓地域では、六甲山系のある北側を「山側」、大阪湾に面する南側を「海側」と称しており、地形をベースとした空間認識が市民の間でみられる。また、六甲山系は江戸時代までは里山として周辺の村々に恵みを与え、明治時代には神戸港開港とともにやってきた外国人によって別荘地やレジャーの場として開発され、現在はそれに加えて多様な娯楽施設が設置され、また毎日登山などが行われる場にもなっており、六甲山の存在は神戸市の暮らしや文化の形成に大きな影響を与えている。

河川の流域は、六甲水系、明石川水系、加古川水系、むこがわ 武庫川水系に大きく四分され、いずれも瀬戸内海に注いでいる。そのうち六甲水系は六甲山系南麓を流れる短く急流の数条の河川からなり、洪水の危険性や堤防による町の分断、神戸港への土砂流出などの諸問題を解決するため、生田川や湊川は河道の付け替えなどの河川改修が行われてきた。他の3水系は東西をつなぐ輸送路として利用されてき

た。

海域の地形は、六甲山系の隆起と大阪湾の沈降によって水深が深くなっている。神戸港は水深の深さに加えて、北西の季節風を遮る六甲山系、西側からの風や明石海峡の潮流の影響を抑える和田岬、錨を下ろしやすい粘土質の海底など、停泊しやすい自然条件に恵まれており、古くから天然の良港と呼ばれてきた。

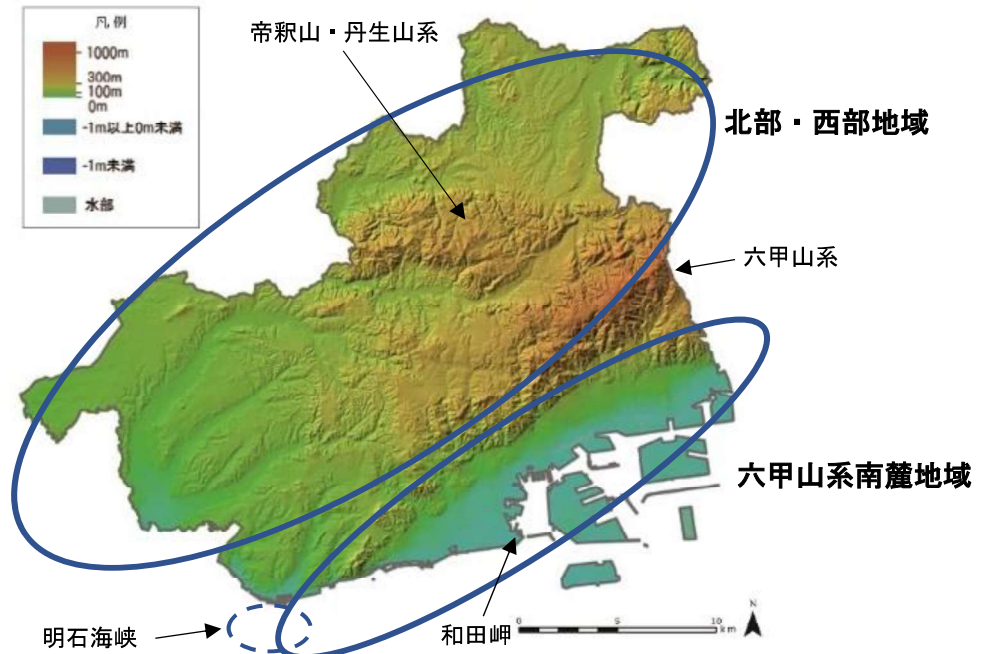


図7 神戸市域の色別標高図

(出典：国土地理院 地理院タイル (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>))



図8 神戸市の主な水系 (出典：神戸市 HP)

1-4 地質・断層

神戸市域の主な地質は、六甲山系を構成する花崗岩類、その北側に分布する有馬層群、主として北西にひろがる神戸層群、さらにその縁辺部にみられる沖積層や大阪層群からなる。

このうち、六甲山系の大部分に分布する花崗岩の中でも東部に分布するものは、固く耐久性が高い

ため良質な石材として使用されてきた歴史があり、六甲山系は大坂城石垣の採石場の1つになっていた。その積出港であった「御影」の地名が由来となって、江戸時代から「御影石」と呼ばれるようになった歴史もある。花崗岩がもたらしたのは石材だけでなく、西宮神社の東南の地域で得られる名水「宮水」がある。六甲山系の花崗岩からミネラル分が溶け出すことで、硬度が高く酒造りに適した成分になっており、灘の酒造りにとっても欠かせない存在になっている。これらの恩恵がある一方で、花崗岩が風化した真砂土は崩れやすい特性もあり、昭和13年（1938）の阪神大水害に代表されるような土砂災害を繰り返し引き起こしてきた要因にもなっている。明治時代以降、土砂災害の発生を抑制するため、六甲山系では長期にわたって治山・砂防事業が行われている。

地質構造的には、六甲山系は有馬-高槻断層帯と六甲-淡路島断層帯が交わる位置にあり、神戸市は活断層の多い地帯にある。そのため、活断層を起因とする直下型地震が発生することがあり、平成7年（1995）1月17日に発生した兵庫県南部地震は甚大な被害をもたらした。断層が露出する場所はいくつかあり、長田区の国指定天然記念物丸山衝上断層はその一つである。また、有馬温泉は非火山性の温泉であり、湧出経路として断層との関連性が指摘されている。

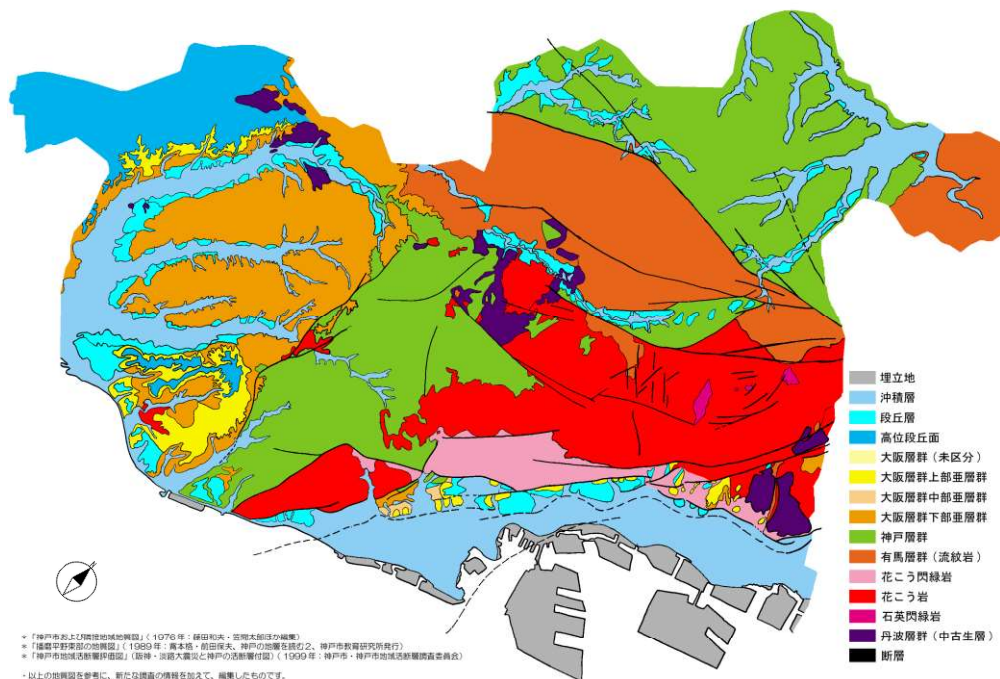


図9 神戸市の地質・断層（出典：神戸市教育委員会デジタル化・神戸の自然シリーズ）

1-5 気候

気象庁アメダス神戸観測所（中央区脇浜海岸通）のデータによると、年平均気温と年間降水量の平年値（1981～2010年）はそれぞれ16.7℃、1216.2mmであり、比較的温暖少雨である瀬戸内気候区の特徴を示している。

六甲山系南麓地域では、秋から冬にかけて、六甲山系から海側に向かって、冷たく強い北風が吹き、これを六甲おろしと呼んでいる。灘の酒蔵では北側の窓を開けて六甲おろしを取り入れることで、酒造りに必要な冷涼な環境を生み出しており、灘の酒造業の発展に大きな影響を与えている。

一方で、六甲山系の北側は高度が上がり、冬の季節風の影響を受けるため、南側よりやや寒冷的な気候となっている。そして、神戸市西区の明石川以西には、集水面積が少ない台地が広がっているため、農業用のため池が多く造られている。

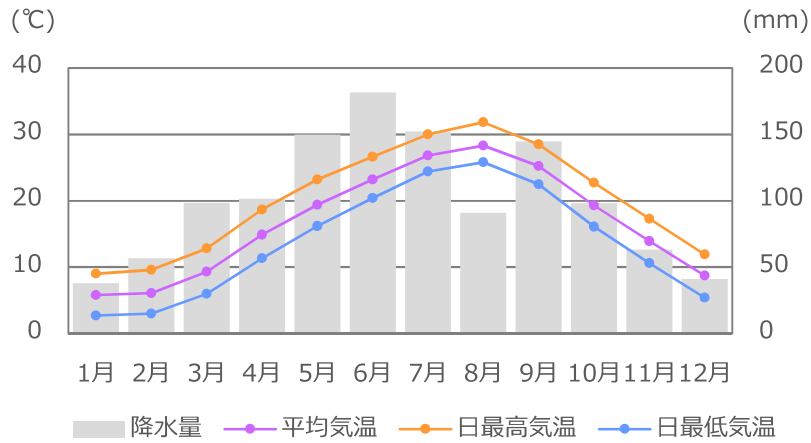


図 10 神戸市の月別降水量と気温 (年平均値 1981~2010 年)
(出典：気象庁アメダス神戸観測所データ)

1-6 生態系・植生

(1) 動植物の種数

神戸市には、森林や田園、河川、海域、市街地といった様々な環境があり、約 8,000 種類もの動植物 (海水に生息しているものを除く) が確認されている。このうち 932 種が神戸版レッドリスト 2020 として選定されている。

六甲山系南麓地域の市街地には、都市環境でも適応できる生物が多く生息している。六甲山系の北側や西側の農村地域では、農地やため池、里山林など里山の環境下で豊かな生物相が育まれている。

瀬戸内海国立公園に指定されている六甲山系には、地理的立地と生育環境から北方系や南紀系、山陽系など様々な系統の植物種が分布している。

沿岸部の海生生物については、須磨海岸以東と比べて、自然海浜等が現存している須磨海岸以西の方が多くの種類の動物 (魚類、甲殻類等) が生息・生育している。

日本最大の内海である瀬戸内海は、冬の水温が低いため、一部の魚類は水温の高い外海へと移動する。一方、カタクチイワシやイカナゴなどは、内海を生息域としている。

表 7 神戸市で確認している動植物の種数

分類		確認種数
動物	哺乳類	35
	鳥類	319
	爬虫類	18
	両生類	17
	魚類	70
	昆虫類	5038
	甲殻類	46
	貝類 (陸産)	100
	貝類 (淡水・汽水産)	132
	動物計	5775
植物 (シダ植物・種子植物)		2224
合計		7999

出典：神戸の希少な野生動植物-神戸版レッドデータ 2020-

(2) 植生

神戸市域の植生は、温暖で湿潤な気候のため、基本的に照葉樹林で構成されていたと考えられる。しかし、六甲山系では明治時代以前から用材や薪炭利用のための伐採をはじめとした山林開発が行われたことで、現存植生は基本的にアカマツやコナラなどで構成される二次林になっている。二次林が多く分布している一方で、六甲山の山頂付近には冷温帯域の自然植生であるブナ林が点在している。

西区伊川谷町にある県指定天然記念物^{たいさんじ}泰山寺の原生林は、面積約 11ha の暖帯常緑広葉樹林であり、コジイ林とウバメガシ林で特徴づけられ、カギカズラなどの貴重種も多数含み、六甲山系の代表的植物生態を保存する貴重な森林となっている。垂水区名谷町にある県指定天然記念物^{てんぼうりんじ}転法輪寺の原生林、北区^{しゃくぶじ}の石峯寺や有間神社などの社寺林においても、規模の大きいコジイの自然林となっている。これらに代表される自然林は、北部・西部地区に比較的多く分布している。

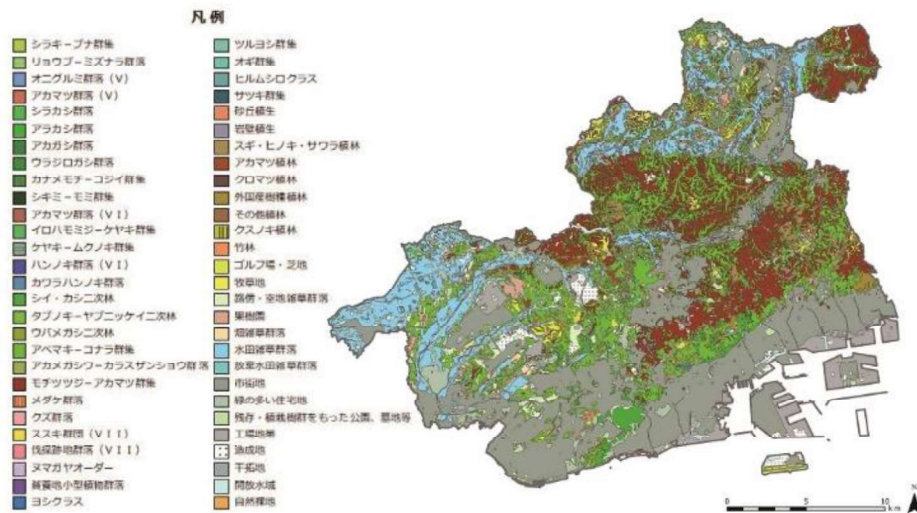


図 11 神戸市の植生 (出典：第 7 回自然環境保全基礎調査(環境省生物多様性センター))

(3) 植物のある環境と人の営み

①里山管理・砂防植林

(2) 植生でも触れたように六甲山系では古くから用材や薪炭利用を目的とした里山管理が広く行われていたが、度重なる自然災害に加え、江戸時代から明治時代にかけての過度の伐採が原因となって、六甲山系は所々ではげ山と化していた。六甲山系の荒廃によって多くの土砂災害が発生していたため、明治 35 年 (1902) から水資源の保全と砂防を目的とした砂防植林が行われ、クロマツやハゼノキ、クスノキなどが植樹された。六甲山の緑化発祥の地である再度山を中心とする植林地は、^{ふたたびこうえん}再度公園・再度山永久植生保存地・神戸外国人墓地として国指定名勝になっている。

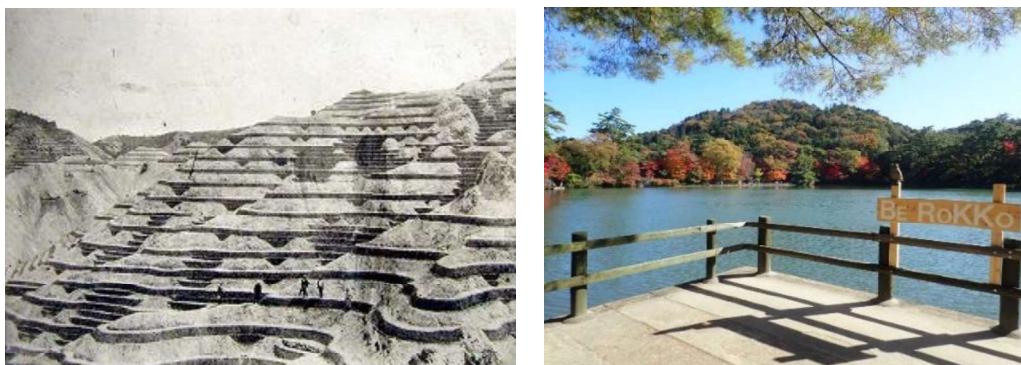


図 12 再度山の明治 35 年 (1902) の緑化の様子 (左) と現在の再度公園 (右) (神戸市森林整備事務所提供)

②社寺林

社寺林は建造物などと一体として守られてきた森であり、時に信仰の対象として地域の歴史の中で守られてきた文化性だけでなく、都市化が進む現代において貴重な植生となっている。さらに生態学的にも価値のあるものでもある。神戸市内には、太山寺の原生林や有間神社の社叢^{しゃそう}など県や市の天然記念物に指定されている社寺林が存在している。また、樹林に限らず、県指定天然記念物神前の大クスなどをはじめとして境内などで巨樹となっている樹木も天然記念物として指定されている。その他にも、住吉川沿いのクロマツや湊川神社の社叢^{みながわじんじゃ}など神戸市市民公園条例による「市民の木」や「市民の森」に指定されている社寺林や巨樹も存在している。



図 13 湊川神社の社叢(左)と神前の大クス(右)

③公園緑地

公園緑地においては、日本最古の近代公園の1つである中央区の国登録記念物(名勝)東遊園地や国指定名勝再度公園・再度山永久植生保存地・外国人墓地など、外国人居留地であった歴史と関連のある名勝地がある。これら2つの公園と中央区の国登録記念物相楽園、須磨区の須磨浦公園、北区の瑞宝寺公園、垂水区の舞子公園は、日本の歴史公園100選(第2次選定含む)に選定されている。

阪神・淡路大震災の際、公園は避難地や救援活動の場としての役割を果たし、この教訓が全国で防災公園の位置付けの見直しや整備推進につながった。東遊園地では、毎年「阪神淡路大震災1.17のつどい」が行われており、慰霊の場となっている。

冷涼な気候である六甲山上には、昭和8年(1933)に牧野富太郎博士の指導を受けて、現在の阪神電気鉄道株式会社が日本初の高山植物園である六甲高山植物園を開園している。現在も民間企業が運営する珍しい植物園である。



図 14 東遊園地の「1.17 希望の灯り」及び「慰霊と復興のモニュメント」(左)と相楽園(右)

1-7 景観

神戸市には、北野町山本通伝統的建造物群保存地区や旧外国人居留地といった異国情緒あふれる町並みの景観や都心・ウォーターフロントなどの港町らしい景観、緑あふれる住宅街の景観、里山や田畑などの農村景観、六甲山系の山並みや明石海峡などの自然環境由来の景観など様々な景観が形成されている。

特に海・まち・山が近接している六甲山系南麓地域は、景観資源が相互に関係することで、神戸市を象徴する景観となっている。

良好な自然的景観を形成している区域のうち、自然環境の保全と開発の調和を図る区域である「風致地区」は、六甲山系や木々の緑の中に家がとけ込み、閑静な町並みを形作っている地域など10か所(約9,215ha(市域の約17%))が指定されている。

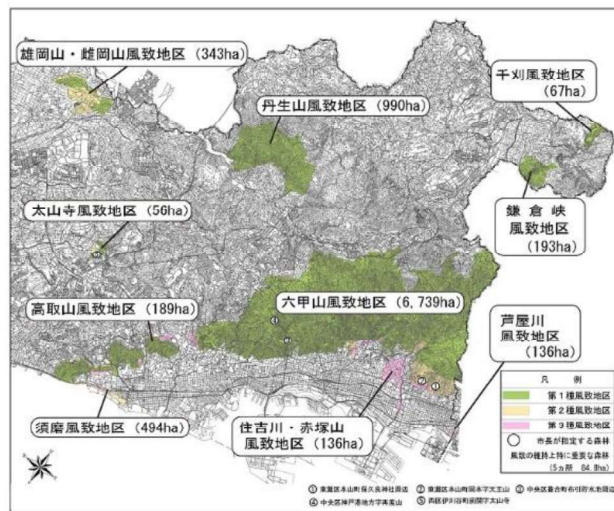


図15 神戸市の風致地区

神戸市では、昭和53年(1978)に神戸市都市景観条例を制定、昭和57年(1982)に神戸市都市景観形成基本計画を策定し、神戸らしい都市景観をまもり、そだて、つくるための施策を推進している。この景観条例は、大都市での景観保全の動きがあった初期に制定されたもので、兵庫県で初の景観条例となっている。さらに平成16年(2004)には景観法も制定され、法と条例により都市景観政策に取り組んでいる。神戸市の行政区域全域(「人と自然との共生ゾーン」を除く。)を景観計画区域とし、条例に基づく景観資源の指定制度を運用している。さらに市民が主体的に景観の形成を図ることを目的として、景観形成市民団体及び景観形成市民協定を認定している。また、景観の保全だけに限らず、市民公募を基に「神戸らしい眺望景観50選・10選」や「神戸都心夜景10選を選定」するなど、景観の魅力化にも取り組んでいる。

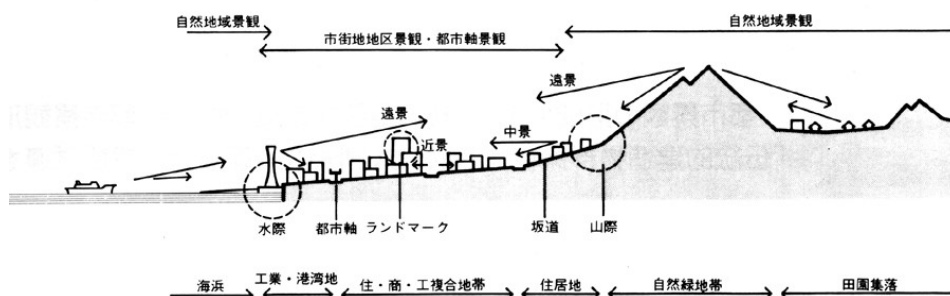


図16 神戸市の地形特性と景観上の特色(出典:神戸市都市景観形成基本計画)



図 17 ウォーターフロントの景観(左)と掬星台からの眺望景観(右)

1-8 自然・地理的環境についてのまとめ

1-3 図 7 で示した 2 つの地域ごとに自然・地理的環境の特徴を整理した。

(1) 六甲山系南麓地域

六甲山系を背山として、主に六甲水系により形成された扇状地と、港に適した水深の深い海域地形が特徴的である。異国情緒あふれる町並みや都市及び港湾地域など特徴的な景観がみられる。また、海沿いの狭い範囲に道路、鉄道などの交通路が集中している。

(2) 北部・西部地域

六甲山系と帝釈山系を中心に丘陵地が広がる。原生林が社叢などに維持されているところがあることに加え、河川段丘に耕作地が連なり、里山の景観が形成されている。河川にそって主要交通路が発達している。

第2節 神戸市の社会的状況

2-1 人口動態

神戸市の人口は、令和2年(2020)9月末の住民基本台帳人口によると1,516,638人である。第二次世界大戦や阪神・淡路大震災による人口減少はあったものの増加傾向は続いてきたが、平成24年(2012)に人口が初めて減少に転じ、以降少子高齢化が進行している。なお、令和4年4月には、1,512,751人に減じている。

平成22年(2010)から令和2年(2020)の人口増減を区別にみると、中央区以東は増加しているが、それ以外の区については減少しており、北区、長田区、須磨区については2020年9月末現在高齢化率が3割を超えている。北区や西区を含む郊外は、高度成長期におけるニュータウンなどの住宅開発によって人口が急増したが、現在は人口減少が進んでいる。また、農村部では老年人口の増加が著しく、農家の後継者不足が顕著となっている。「神戸人口ビジョン(改訂版)」によると、令和12年(2030)には1,454,000人、令和42年(2060)には1,110,000人まで減少することが推計されている。

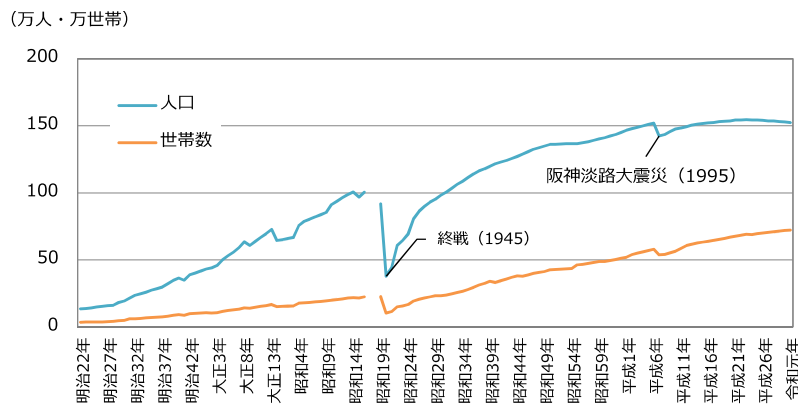


図18 人口・世帯の推移(明治22年(1889)～令和元年(2019)) (出典：神戸市統計書 令和元年度版)

表8 各区・年齢階級別人口(住民基本台帳人口(外国人を含む)) (出典：神戸市住民基本台帳人口)

	令和2年(2020)9月末				平成27年(2015)9月末	平成22年(2010)9月末	平成22年(2010)～令和2年(2020)人口増減
	年少人口(15歳未満)	生産年齢人口(15～65歳未満)	老年人口(65歳以上)	総人口	総人口	総人口	
全市	183,396 12.0%	911,058 59.7%	432,406 28.3%	1,516,638	1,547,494	1,556,787	-40,149 (-3%)
東灘区	28,271 13.2%	132,874 62.2%	52,528 24.6%	213,672	213,635	209,926	+3,746 (+1%)
灘区	17,132 12.9%	81,605 61.5%	34,049 25.6%	136,426	132,448	129,948	+6,478 (+4%)
中央区	14,163 10.2%	91,495 66.1%	32,796 23.7%	143,359	130,248	124,976	+18,383 (+14%)
兵庫区	10,790 9.9%	67,075 61.6%	31,095 28.5%	106,897	109,019	110,824	-3,927 (-4%)
北区	25,903 12.1%	122,415 57.0%	66,521 31.0%	210,775	223,869	230,094	-19,319 (-9%)
長田区	9,371 9.6%	55,316 56.9%	32,482 33.4%	94,213	100,868	104,943	-10,730 (-11%)
須磨区	18,289 11.4%	90,400 56.4%	51,716 32.2%	157,604	165,269	169,778	-12,174 (-8%)
垂水区	29,321 13.3%	125,075 56.8%	65,616 29.8%	214,936	224,550	225,624	-10,688 (-5%)
西区	30,156 12.5%	144,803 60.2%	65,603 27.3%	238,756	247,588	250,674	-11,918 (-5%)



【推計方法】2020年の推計値から「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」における仮定値（純移動率、生残率、出生率、出生性比）を用いて推計している。（出生中位・死亡中位仮定）

図19 人口の将来展望（推計結果）（出典：神戸人口ビジョン（改訂版））

2-2 土地利用

神戸市の土地利用は、六甲山系を境に様相が分かれる。六甲山系南麓地域は、中心市街地や住宅街などが広がり、湾岸部には工業地帯や人工島も存在するなど都市的な土地利用となっている。一方、六甲山系を挟んで北部・西部地域は、集合住宅や戸建て住宅が集まるニュータウンがあるものの、山林や農地が多くを占めている。

都市計画としては、東灘区から須磨区にかけて臨海部に見られる古くからの市街地や埋立地、北区・垂水区・西区などのニュータウンを主とした市域の約4割（約20,395ha）が市街化区域であり、コンパクトなまちづくりが進められている。主に北区や西区で指定されている市街化調整区域では、無秩序な市街化が抑制され、良好な農村環境や自然環境が保全・継承されている。

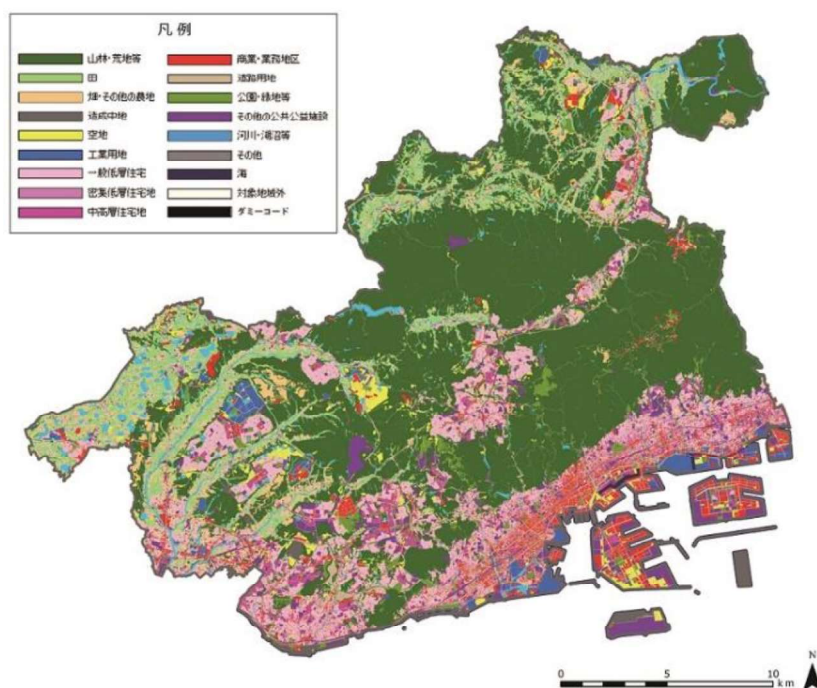


図20 神戸市の土地利用図（出典：数値地図5000（土地利用）2008年調査）

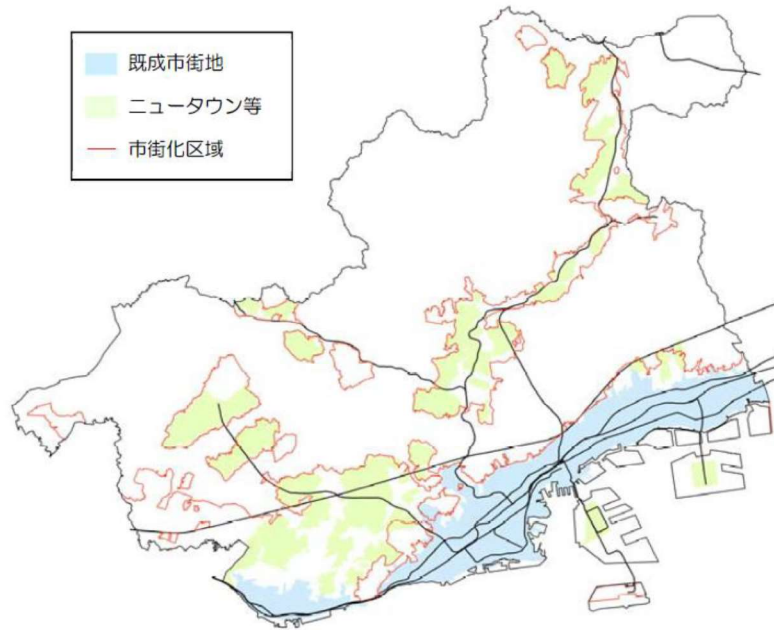


図 21 神戸市の市街地等の分布と市街化区域（出典：神戸市都市空間向上計画）

2-3 交通

（1）道路交通

旧街道としては西国街道や西国浜街道、有馬街道（湯山街道）などがあり、北区淡河町など宿場町の町並みが残る地域もある。

幹線道路としては国道 2 号線や国道 43 号線、山陽自動車道、中国自動車道、新名神高速道路、阪神高速道路などがあり、広域的な交通ネットワークが構築されている。市内の各市街地を結ぶ道路網には、市と民間のバス路線が多く整備されている。これらの道路やバス路線のネットワークは六甲山系南麓地域の市街地では発達しているが、北部・西部地域の農村部（旧集落）では市街地に比べて十分に整備されているとは言えない状況にある。

（2）鉄道交通

現在の神戸市域に鉄道が開通したのは、明治 7 年（1874）の大阪～神戸間が最初であり、日本で 2 番目の路線である。政府の路線開拓の経緯により、J R 神戸駅は東海道本線（東京～神戸）の終点であり、山陽本線（神戸～門司）の起点となっている。

J R 在来線・新幹線や私鉄、地下鉄、新交通システム、ケーブルカーなど様々な鉄道路線があり、各市街地間を結ぶ生活利用だけでなく、観光地へのアクセスや全国への広域的な利用が行われている。各交通機関が集まる三宮は神戸市のターミナル拠点となっており、これらの鉄道のネットワークは主に六甲山系南麓地域の市街地に集中している。北部・西部地域においては、ニュータウンと都心を結ぶ鉄道はあるが、農村地域（旧集落）の利便性は低い状況にある。

市内には鉄道事業者によって開発された住宅地がいくつかあり、その例として阪神急行電鉄（現、阪急電鉄株式会社）による東灘区の岡本住宅地や神戸有馬電気鉄道（現、神戸電鉄株式会社）による北区の鈴蘭台の宅地開発があげられる。一方で、別荘地やレジャーの場として開発された六甲山や摩耶山には、ロープウェイやケーブルカーなどの交通手段が整備された。

(3) 海上交通

現在の神戸市域に港が築かれたのは、奈良時代に行基ぎょうきが築いたとされる摂播五泊せつぱんごはくの1つである大輪田泊おおわだのとまり（現在の兵庫区沿岸部）が始まりとされている。大輪田泊は、平安時代末期に平清盛たいらのきよもりが修築し、日宋貿易の拠点とされた。室町時代には、足利義満あしかがよしみつにより日明貿易の拠点となり、江戸時代には兵庫津ひょうごのつと呼ばれ、北前船の発着港として栄えた。神戸港は、日米修好通商条約（安政5年（1858））が締結された10年後の慶応3年（1868）12月7日に開港し、神戸外国人居留地が造成された。

現在の神戸港は国際貿易港（五大港）の1つであり、旅客、貨物ともに多くの人に利用されている。上海や九州、四国などと往来する旅客船とフェリー（定期航路）があり、クルーズ客船も入港する。

※ 瀬戸内海の航路に沿って摂津から播磨にかけての地域に置かれた5か所の港。

(4) 航空交通

ポートアイランド沖に整備されている神戸空港は、平成18年（2006）に開港した海上空港である。東京（羽田）や札幌（新千歳）、那覇など10都市以上に就航している（2020年10月現在）。



図22 神戸市の公共交通網図（出典：神戸市地域公共交通網形成計画）

2-4 産業

(1) 農水産業

神戸市では北区、西区を中心として都市近郊型の農業が営まれており、野菜や果物、花卉、水稻かきなど様々な農産物が生産されている。農林水産省発表の平成30年度市町村別農業産出額（推計）は146億8千万円であり、県下では2番目の農業産出額となっている。また、畜産も盛んであり、神戸ビーフや乳製品も多く出荷されている。

瀬戸内海に面していることもあり水産業も営まれている。明治時代はイカナゴやイワシなどを対象とした地曳網などの漁が主体であった。その後、漁船の動力化が進展し、近海

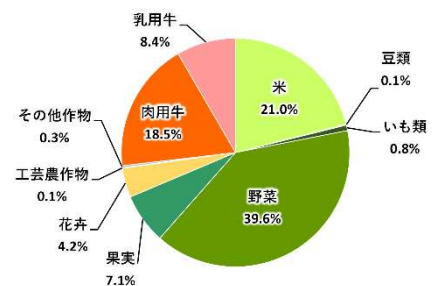


図23 神戸市の種類別農業産出額の割合（出典：平成30年度市町村別農業産出額（推計）（農林水産省））

漁業も行われるようになっていったが、高度経済成長による周辺環境の変化により漁場は縮小していった。現在、垂水・塩屋・舞子の3つの漁港と、須磨浦・須磨東・長田・兵庫の4つの漁船だまりを有している。

イカナゴは、春先になると各家庭で炊く郷土料理「いかなごのくぎ煮」として親しまれており、長田区や垂水区などが発祥と言われている。

表9 主な神戸市の特産品（農水産物）

特産品	概要	産地
野菜栽培 (こうべ旬菜)	近代以前まで米麦などが中心だったが、明治・大正時代から、都市の発展と呼応して、野菜を主とした食用農産物が生産されるようになった。その頃から、神戸や大阪などの市場にも出荷されていた。明治37年(1904)には、神戸市農会が設立され、西洋野菜や果実、花卉などの園芸作物の改良や、畜産業の改良が進められていた。そうした中、昭和4年(1929)の昭和恐慌を起因とする昭和農業恐慌が発生し、神戸市はその対策として、水稻栽培から野菜及び果物栽培への転換を進め、大正時代・昭和戦前期にかけて次第に盛んになっていった。西神や北神地域での野菜などの供給は、臨海部での農地の宅地転用や自動車の普及などにより、重要な役割を果たすようになった。 現在、小松菜やチンゲン菜、キャベツ、トマトなどが兵庫県内の主要産地になっている。平成10年(1998)より、神戸市内で生産される人と環境の安全に配慮された「こうべ旬菜」が栽培されている。	主に西区、北区
山田錦(酒米)	六甲山系の北側は山田錦の生産に適した環境にあり、広く全国に出荷されている。山田錦のベースである“山田穂”の名称は、北区山田町藍那の地名が由来とする説がある。	主に北区
花卉(かき)栽培	温暖で晴天の日が多いため、花の栽培に適した環境にある。新鉄砲ゆり、切花用、菊などが生産されている。花の栽培は、明治時代末期頃に山田村において趣味として栽培した菊苗を本格的に栽培したのが始まりとされる。大正時代の生花の普及などによって切花の需要が拡大し、盛んになっていった。	西区伊川谷町・岩岡町・平野町・押谷谷町、北区淡河町・山田町
神戸ビーフ	兵庫県産の黒毛和種である但馬牛を素牛として生産されている。品質の高い牛肉のみが「神戸ビーフ」の称号が与えられ、世界的にも認知されている銘柄牛である。 神戸港開港以前から既に但馬産の牛肉は外国人の間で高い評価を得ていた。神戸港開港後、イギリス人が神戸で牛肉店を開業し、その後日本人の食生活にも浸透した。昭和40年代の畜産団地の造成などにより、肉用牛の頭数は大きく増加した。神戸ビーフのブランド定義は、昭和58年(1983)に神戸肉流通推進協議会が明確化した。	主に西区、北区
いかなごのくぎ煮	神戸市内沿岸漁業の主要漁獲物で、毎年2月末から3月にかけて漁期が始まる。いかなごのくぎ煮(佃煮)は、郷土料理として親しまれている。	長田区から垂水区など沿岸部
ちりめん	イワシの稚魚を食塩水で煮た後に乾燥させたものである。5月から11月に水揚げされる。	垂水区、須磨区など沿岸部
須磨海苔	兵庫県が有数の海苔生産地であり、11月から4月に本養殖される。海苔養殖は、昭和35年(1960)から須磨浦地区で試験的に行われ、その後浮き流し式による本格的な養殖が始められた。	垂水区、須磨区など沿岸部

(2) 工業

六甲山系南麓地域の沿岸部は、大阪湾沿いに立地する阪神工業地帯の一部であり、鉄道車両や船舶、鉄鋼などの重化学工業が盛んな一大工業地帯となっている。内陸部においても西区を中心に産業団地が開発されており、神戸複合産業団地（神戸テクノ・ロジスティックパーク）や西神インダストリアルパークなどが整備されている。

神戸市の工業は神戸港が開港されてから、海と山が近接している豊かな自然環境や国際貿易港の存在、外国文化との交流により発達してきた。

当初はマッチ製造などの軽工業が中心であったが、明治時代末期頃から臨海部で造船所や製鉄工場が林立し、重化学工業の町として発展していった。また神戸市は、阪神・淡路大震災後の経済活性化のために、ポートアイランドに先端医療技術の研究開発拠点を整備し、医療産業に関わる企業の誘致を推進している。

地場産業としては、自然環境を活かして発展した「酒造」、国際貿易港のある立地を活かして発展した「ケミカルシューズ」や「真珠加工」、外国文化を取り入れて発展した「洋菓子」や「近代洋服・アパレル」など様々な産業が存在している。これらの産業は、西洋文化が発祥とされるものが多い。

伝統工芸品としては、明治6年（1873）開催のウィーン万博に出品された有馬籠や室町時代より生産されているとされる有馬の人形筆があり、兵庫県指定伝統的工芸品に指定されている。また、江戸時代以前からの歴史のある有馬筆の作成に係る伝統的な技術は、兵庫県指定無形文化財に指定されている。

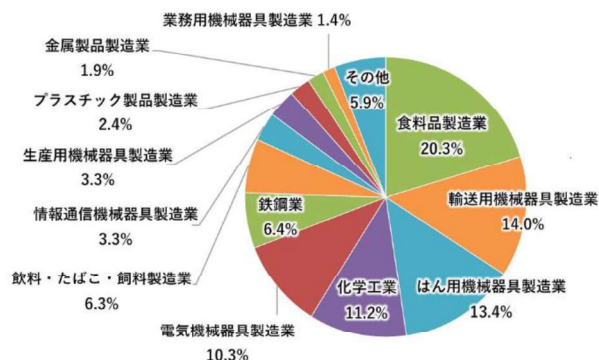


図 24 神戸市の産業分類別製造品出荷額等の割合
(出典：2020年工業統計調査(経済産業省))



図 25 有馬籠
(出典：Feel KOBE (一財) 神戸観光局)



図 26 有馬の人形筆(左)と有馬筆(右) (出典：Feel KOBE (一財) 神戸観光局)



表 10 主な神戸市の地場産業

地場産業	概要	地域
酒造	灘五郷とは、今津郷（西宮市）、西宮郷（西宮市）、魚崎郷（東灘区）、御影郷（東灘区）、西郷（灘区）のことを指す。灘の酒造りは、室町時代から行われていたという記録があるが、寛永年間（1624～43）に伊丹の雑喉屋文右衛門が西宮に移り住み酒づくりを開始したのが最初とされる。18世紀以降、樽廻船によって江戸向けに輸送されたことで発展した。六甲山から吹く冷たい風である「六甲おろし」、硬水の「宮水」、酒米の「山田錦」、丹波杜氏など人材の集まりやすさなどの良好な環境が灘の酒造りを発展させた。	灘区、東灘区
ケミカルシューズ	神戸港開港後に発展していたゴム工業からゴム靴の製造が行われていた。戦後、物資不足に陥り、化学素材を原料としたケミカルシューズが製造されるようになった。長田区周辺は全国有数の靴の産地となっている。	主に長田区
真珠加工	昭和3年（1928）の真円真珠特許公開後に真珠の集散地として発展した。神戸市が真珠加工の町として発展した理由には、三重県や愛媛県など真珠の養殖地に近いこと、国際貿易港である神戸港があること、六甲山からの反射光が真珠の選別に適していたことなどが挙げられる。北野町には、「パールストリート」と呼ばれる通りがあり、真珠関連の会社が集積している。現在でも、世界に流通する日本の真珠うち約7割は神戸市から輸出されている。	主に中央区 （北野町周辺）
洋菓子	外国文化との交流の中で、ゴンチャロフ製菓やモロゾフ、ユーハイムなどに代表される企業が営業を開始し、神戸市で本格的な洋菓子づくりが始まった。その後、外国文化を取り入れた神戸市民によって洋菓子文化は発展した。	全域
近代洋服・アパレル	神戸市で初めての洋服店は、明治2年（1869）にイギリスの洋服商であるカベルが旧居留地16番館に開業した洋服店とされている。その後、オーダーメイドのテーラーや婦人服、子供服など多くのアパレル企業が設立された。昭和48年（1973）の「ファッション都市宣言」以来、官民連携でファッション産業によるまちづくりを進めている。	中央区を主として 全域
神戸洋家具	神戸港開港後、海外から持ち込まれた洋家具を船大工が修理を行っていた。その後、洋家具の修理から製造へと成長し、神戸市は日本における洋家具発祥の地となった。	主に垂水区
コーヒー	神戸港開港によってもたらされた外国文化と神戸港からの生豆の輸入により、多くの焙煎業者が誕生した。明治11年（1878）に喫茶店の元祖であるコーヒー・ハウスが日本で初めて開業したとされる。コーヒー文化は現在もなお、市民生活に根付いている。	中央区、兵庫区、 長田区を主として 全域
マッチ	日本におけるマッチ産業は東京で始まったが、その後海外輸出に適した神戸市での生産が盛んとなった。ヨーロッパでのマッチ生産が滞った第一次世界大戦時には、多くのマッチが神戸市で製造されて、神戸港から大量のマッチが輸出された。現在は生産地を姫路市周辺に移しているが、兵庫県内のマッチの全国シェアは90%にのぼる。	

(3) 観光業

神戸市には、神戸ポートタワーや神戸海洋博物館などがある「都心・ウォーターフロント」や異国情緒溢れる「北野異人館街」「旧居留地」、日本三大中華街の一つである南京町、自然を活かしたレジャー施設が多く集まる六甲・摩耶^{まや}エリア、日本三名泉の一つである有馬温泉など集客性の高い観光資源が多く存在している。それ以外にも、西区の太山寺や北区の無動寺など重要文化財を有する古刹も多く、観光資源として活用を図れるものは多い。また、南京町春節祭や須磨大茶会・有馬大茶会、神戸まつり、神戸ルミナリエなど神戸市の歴史や文化性と関係の深いイベントが開催されている。

令和元年(2019)の神戸市のイベントを除く観光入込客数は、日帰り客と宿泊客と合計で 3,542 万人となっている。観光客の訪問先は、六甲山系南麓地域（市街地（北野含む）、神戸港など）が多くを占めている。

神戸市では、神戸市ならではの観光資源の発掘・魅力化と滞在型観光を進めることで神戸観光の推進を図っている。市内の歴史的な建造物を活用した映画などのロケーション誘致を行い、神戸の魅力を発信している。現在は、新型コロナウイルス感染症により、インバウンド客や遠距離客のシェアが低下する一方、神戸でも関西エリアからの宿泊シェアが大きくなるなど、近距離観光が人気となっている。

神戸市としても、近距離マーケットの開拓を柱として、このエリアを重点とする広報に加えて、神戸ならではのライフスタイルをゆっくり滞在して体験できる商品の充実などに取り組んでいる。

古くから国際都市として発展してきた神戸市では、国際会議や展示会などを行うMICE（Meeting（会議・研修・セミナー）、Incentive tour（報奨・研修旅行）、Convention（国際会議）、Exhibition/Event（展示会・イベント））の誘致に取り組んでおり、令和元年（2019）の国際会議開催件数は 438 件と東京（23 区）に次いで多い（出典：日本政府観光局（JNTO）データ）。MICEの会場として、歴史的な建造物のユニークベニュー[※]としての活用が求められている。

※ 歴史的建造物などを会議・レセプションの会場とし、特別感や地域特性を演出できる場として利用すること。

表 11 令和元年（2019）のエリア別観光入込客数（出典：神戸市統計データ）

エリア	観光入込客数 (万人)	前年比 (%)
市街地	2,520	-1.8
うち北野	147	+6.8
神戸港	536	+10.1
六甲・摩耶	191	+2.0
有馬	161	+3.7
須磨・舞子	378	+0.7
西北神	406	+17.5

※エリア間の移動があるため、全市の合計とは一致しない

2-5 多文化共生

開港とともに神戸市に持ち込まれた外国文化が、市民の生活に取り入れられてきた。日本における活動写真やゴルフ、洋服、ジャズ、近代登山などは、神戸発祥とされている。

明治時代末期から昭和時代初期にかけて、阪神間を中心として実業家や文化人が和を基調としつつ西洋文化を取り入れた生活様式などは「阪神間モダニズム」と呼ばれ、高級住宅街や別荘、ホテル、娯楽施設などの開発が進められた。ヴォーリズが設計したフロインドリーブ本店（旧ユニオン教会）や六甲山荘（旧小寺家山荘）（いずれも国登録有形文化財）などの建造物や六甲山上のゴルフ場内の建造物など、この時期に作られたものを目にすることができる。

現在も多くの外国人が住む神戸市では、人口の約3%を外国人が占めている。外国人居住者は中央区や長田区を主とした六甲山系南麓地域に多く、様々な宗教や外国人コミュニティが形成されている。北野町の異人館、南京町、様々な宗教施設などの異国を感じさせる町並みや建物とともに、春節祭、神戸まつりで披露されるサンバなどの行事やイベントで見られるように、神戸市は多文化が共生する都市となっている。

表 12 神戸市内の外国人人口（2020年9月末）
（出典：神戸市住民基本台帳人口）

国籍	人口	全人口に対する比率 (%)
韓国または朝鮮	16,016	1.1
中国	13,028	0.9
ベトナム	7,224	0.5
フィリピン	1,388	0.1
台湾	1,328	0.1
ネパール	1,162	0.1
米国	1,045	0.1
インド	923	0.1
ブラジル	523	0.0
インドネシア	468	0.0
その他	4,434	0.3
合計	47,539	3.1



図 27 春節祭が行われている南京町の様子

2-6 市民による活動と市民参加のまちづくり

神戸市は古くから市民により様々な活動が行われてきた都市である。大正10年（1921）に日本初の市民による生活協同組合である「有限責任神戸購買組合」・「有限責任灘購買組合」（現、生活協同組合コープこうべ）が誕生している。また、市民による六甲山の緑化も古くから行われており、「六甲を緑にする会」の寄附金による植樹など様々な市民団体による緑化活動が行われてきている。

市民によるまちづくり運動は、1960年代の丸山地区や真野地区（ともに長田区）が始まりである。その後、これらの住民運動を受けて、昭和53年（1978）に制定された神戸市都市景観条例ではまちづくり協議会を制度化、昭和56年（1981）には神戸市地区計画及びまちづくり協定等に関する条例（まちづくり条例）を全国に先駆けて制定し、地域提案型のまちづくりが進められている。平成16年（2004）には、協働・参画3条例（神戸市民の意見提出手続に関する条例、神戸市民による地域活動の推進に関する条例、神戸市行政評価条例）を制定し、地域組織などのゆるやかな連携によるまちづくりを推進し

ている。各区役所にはまちづくり課が設立され、地域からのまちづくりを推進する体制となっている。

阪神・淡路大震災からの復興では、協働と参画によるまちづくりが進められた。震災復興土地区画整理事業など都市計画事業の計画案の作成にあたって、まちづくり協議会の組織化、まちづくり専門家の派遣、現地相談所の設置が進められ、市民・事業者・行政による協働と参画のまちづくりが行われた。また、震災以前から地域活動が盛んであった真野地区（長田区）などにおいて、発災時の救助活動や復興に向けた取り組みが地域ぐるみで迅速に行われ、防災における地域コミュニティの重要性が再認識されたことや、消火や救助活動が行政だけでは対応しきれなかった教訓から、震災直後に防災福祉コミュニティが全市的に結成された。なお、阪神・淡路大震災が発生した平成7年（1995）は、被災地に1年間で約138万人ものボランティアが来たことから「ボランティア元年」と呼ばれ、被災者を支援するボランティア団体が数多く生まれた。ボランティア団体の中にはNPO法人となり、新たな地域の担い手として現在もなお継続的に活動を続けている団体もある。

東遊園地で毎年1月17日に行われている「阪神淡路大震災1.17のつどい」は、遺族、市民、ボランティアらと神戸市が連携して開催している。平成14年（2002）には、NPO法人「阪神淡路大震災1.17希望の灯り」が設立され、震災の体験を伝えていく活動を継続的に展開しており、鎮魂と震災経験の継承は市民が中心となって行われている。

北区や西区の農村地域は、人と自然との共生ゾーンの指定などに関する条例に基づき、地域住民などで構成される里づくり協議会が里づくり計画を定め、地域の独自の里づくりが行なわれている。

2-7 社会的状況についてのまとめ

1-3図7で示した2つの地域ごとに社会状況の特徴を整理した。

（1）六甲山系南麓地域

人口は、東部の東灘区から中央区で現在も増加しているが、兵庫区以西の西部は減少が著しい。海と山が近接している地形の制約を受け、道路・鉄道・空港・港湾など主要交通網が集中しており、それを背景に工業地帯及び住宅地が形成されている。また、大阪湾に面しており、近海漁業や海苔養殖など漁業も盛んに行われている。

六甲山系・北野異人館街・旧居留地・南京町・ウォーターフロントなど景観の優れた観光地も多い。また、現在でも外国人が居住し、近代の建造物や様々な宗教施設が含まれる町並みや春節祭などの海外に由来する行事によって外国文化を感じることができる。

六甲山系南麓地域は、震災の被害が大きかった地域ではあるが、その経験を活かしたまちづくりを行いながら、震災の鎮魂と体験を継承することも行われている。

（2）北部・西部地域

山林や農地が広がる農村地域の中にニュータウンが点在している。この地域では、人口の減少に加え、急速な高齢化が目立つ。近代以前に利用されていた旧街道のルートが現在も主要幹線として活かされている。ただし、六甲山系南麓地域と比較すると、鉄道などの公共交通機関が十分に整備されていない。野菜栽培など近郊農業や山田錦の栽培など農業が盛んに行われている。近年は、里山の環境を活かした里づくりや移住誘致活動なども行われている。また、良質の温泉と風情のある町並みが魅力の有馬温泉や北区・西区の社寺は、この地域の観光資源として重要である。

第3節 神戸市の歴史的背景

3-1 旧石器時代から縄文時代

【神戸市域最古の人々】

神戸市域で最も古い人類活動の痕跡は、今から3万年以上前の後期旧石器時代にさかのぼる。市内各地で在野の考古学者により戦後の早い頃から石器の採集が報告されてきた。

兵庫区えげやまいせきの会下山遺跡、西区かなぼういけいせきの金棒池遺跡などでは、サヌカイト製のナイフ形石器が発見されている。国府型こうがたナイフ形石器と呼ばれるもので、石核せつかく※1から連続して横長剥片よこながはくへん※2をはぎ取る技法が特徴的である。大阪平野や瀬戸内沿岸地域でよくみられ、当時の文化圏、交流圏を考えるうえで重要な資料となる。また、国府型ではない小形のナイフ形石器や石器を作り出すための石核が垂水区おおとしやまいせきの大歳山遺跡、西区おおさらいけいせきの大皿池遺跡、金棒池遺跡などで確認されている。

金棒池遺跡では、縄文時代への過渡期に位置付けられる石器である細石刃さいせきじん※3と細石刃核も採集された。後期旧石器時代を通じて人々の活動があったことがわかる。

※1 石器の素材をはぎ取った際に残った原石 ※2 石器の原石を打ち欠いて作った横長の薄い破片

※3 幅及び長さが1 cm程度のカッターの刃のような形をした石器

【土器の出現と集落の形成】

縄文時代は、約16,000年前から数千年間続き、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に区分される。氷河期がおわり、暖かい気候になるとともに、定住が始まり、土器や磨製石器の使用が始まった時代である。

縄文時代草創期の遺物としては有茎尖頭器ゆうけいせんとうき※1が見つまっている。東灘区の本山遺跡、西区の玉津田中遺跡もとやまいせき たまつたなか、金棒池遺跡いせき しもたにがみ、北区の下谷上、灘区たきの おくいせきの滝ノ奥遺跡などで発見された。しかし、単体での出土が多いため、生活の場であるかどうか明らかではない。

最も古い定住の跡を確認できるのは、中央区くもちいせきの熊内遺跡である。今から1万年ほど前の縄文時代早期の堅穴建物くもいせき※2が見つかった。中央区おおはなしきの雲井遺跡では、神戸市域最古の早期の押型土器（大鼻式、大川式）が確認されている。このほか、大川式に続く早期の縄文土器（神宮寺式じんぐうじしき、高山寺式こうざんじしき）や石鏃せきぞく※3などが須磨区おおてちょういせきの大手町遺跡、境川遺跡さかいがわいせき、天神町遺跡てんじんちょういせきなどで見つかり、このあたりにも集落があった可能性が考えられる。また、干潟を歩く縄文人の足跡が垂水区たるみひゅうがいせきの垂水日向遺跡で見つまっている。約7,300年前の鹿児島県鬼界カルデラ噴火による火山灰でパックされた状態で発見されており、人々の生活が鮮明によみがえる遺構である。この遺跡では、縄文時代中期から晩期の土器を含む洪水の跡も確認されている。厚さ2 mの土石流堆積層と巨大な流木が確認でき、自然災害の大きさがわかる。

縄文時代前期の遺跡は、あまり確認されていない。その中でも、垂水区の大歳山遺跡は戦前から調査されてきた学術上重要な遺跡である。大正時代から昭和時代にかけて、明石原人骨の発見で有名な直良信夫氏なおらのぶおが発掘調査を行った。出土した縄文土器は「大歳山式土器」と呼ばれ、縄文時代前期末の型式の一つとなっている。昭和40年代の開発と保存運動を経て、現在は一部を史跡公園として保存、整備している。

※1 槍などに使用されたと考えられている根元に突出がある石器。 ※2 地面を四角形や円形に掘り下げて造った建物。

※3 石で作られた矢の先端部分

【集落の発展と交流】

縄文時代中期には、遺跡数がやや増加する。東日本では遺跡数が爆発的に増加し、火焰形土器^{※1}などに代表される装飾性豊かな縄文土器が作られる時期である。近畿地方でもやや立体的な文様の縄文土器が作られ（北白川C式土器）、中央区の雲井遺跡では多くの土器が出土している。

縄文時代後期に入ると、中央区の生田遺跡、北区の淡河中村遺跡、原野・沢遺跡、西区の長坂遺跡など、中期までとは異なり広範囲で遺跡が確認される。西区の元住吉山遺跡は、昭和2年（1927）に発見され、直良信夫氏と小林行雄氏の研究によって広く知られた。出土した土器は「元住吉山式土器」と呼ばれ、縄文時代後期後半の土器の指標となっている。また、北区の原野・沢遺跡では、竪穴建物の一角に完形の土器が埋められた状態で見つかった。埋設土器（埋甕）と呼ばれるもので、民俗例などから乳幼児の埋葬施設、又は産後儀礼ではないかと考えられている。当時の人々の世界観を知るうえで重要な事例である。

縄文時代晩期では、代表的な遺跡として灘区の篠原遺跡が挙げられる。出土した土器は「篠原式土器」と呼ばれ、縄文時代晩期の土器の指標となっている。また、東北地方の亀ヶ岡式系土器や遮光器土偶^{※2}、北陸地方の土器なども出土しており、当時のモノや人の交流を考えるうえで重要な遺跡である。

※1 炎が舞い上がったような形をした土器。

※2 目の部分に遮光器と呼ばれるゴーグルをつけているような形をした土偶。



図 28 垂水・日向遺跡で発見された足跡(左)と原野・沢遺跡で発見された埋甕(右)

3-2 弥生時代

【弥生時代のはじまり】

弥生時代は、水稻耕作が始まり、青銅器や鉄器を使用し始めた時代である。水稻耕作は紀元前5世紀頃に北部九州に伝わり、神戸市域を含む近畿地方に広まったと考えられているが、さらに遡るという研究もある。

神戸市域における弥生時代の最も古い集落は、兵庫区の大開遺跡で見ついている。弥生時代前期前半の環濠集落^{※1}で、環濠が竪穴建物などで構成された居住域を取り囲んでいる。下層に縄文時代晩期の遺構も確認されており、縄文時代から弥生時代への過渡期に位置する遺跡として重要である。

須磨区の戎町遺跡では、弥生時代前期後半以前の水田跡が見つかり、水稻耕作が近畿地方に広まった初期のものと思われる。同時期の東灘区の本山遺跡では、弥生時代前期初めの木製農耕具や

穂摘具の石包丁などがまとまって出土しており、農耕文化開始期における重要な遺跡である。

弥生時代の墓制については、西区の新方遺跡^{しんぼういせき}において弥生時代前期から中期にかけての墓が見つかり、埋葬された人骨も良好な状態で出土した。鹿角製の指輪^{ろっかくせい}を6つ装着した状態のものや、上半身に17点もの石鏃を伴い埋葬されているものなどが見つかっている。縄文時代的な抜歯^{※2}があるものや、先述した石鏃を身に受けた人骨から想像されるその死因など当時の社会を紐解く貴重な資料である。

※1 周囲に濠（堀）を巡らせた集落 ※2 成人儀礼と考えられている健康な歯を抜き取る行為

【拠点的な集落と高地性集落】

弥生時代中期になると、平野部では、中央区及び兵庫区の楠・荒田町遺跡^{くすのき あらたちょういせき}や西区の玉津田中遺跡などの大規模で拠点的な集落が形成される。一方で、弥生時代中期から後期にかけて六甲山系南麓地域や西区の河川沿いの標高100～200mの丘陵上に集落を形成するようになる。高地性集落と呼ばれ、特徴的な立地であるため、平野部の集落との機能差が議論となっている。代表的な高地性集落として、東灘区の東山遺跡^{ひがしやまいせき}、金鳥山遺跡^{きんちょうざんいせき}、灘区の伯母野山遺跡^{おぼのやまいせき}、中央区の布引丸山遺跡^{ぬのびきまるやまいせき}、西区の頭高山遺跡^{ずこうざんいせき}、表山遺跡^{おもてやまいせき}、城ヶ谷遺跡^{じょうがたにいせき}などが挙げられる。表山遺跡や城ヶ谷遺跡ではV字状の環壕が巡っていることが発掘調査で確認されている。また頭高山遺跡では約40棟、城ヶ谷遺跡では90棟前後の竪穴建物が確認されており、大規模な集落であったことがわかる。

弥生時代中期には、西区の玉津田中遺跡や東灘区の北青木遺跡^{きたおうぎいせき}で方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}※1とその埋葬施設である木棺が確認されている。弥生時代後期には、東灘区の深江北町遺跡^{ふかえきたまちいせき}で円形周溝墓^{えんけいしゅうこうぼ}※2、北区の北神ニュータウン内第4地点遺跡^{はこしきせつかん}で箱式石棺^{たいじょうぼ}を埋葬施設とする台状墓^{だいじょうぼ}※3が見つかり、

※1 方形の墳丘の周りに溝を巡らせた墓 ※2 円形の墳丘の周りに溝を巡らせた墓

※3 主に丘陵地の尾根上に造られた低い台状の墳丘の周りに溝を巡らした墓

【神戸市内出土の銅鐸】

六甲山系南麓地域では、銅鐸^{どうたく}※1など青銅器の出土が多いことも特徴的である。これまでに8か所から計21個の銅鐸と、2か所から計8個の銅戈^{どうか}※2が見つかり、中でも灘区桜ヶ丘町では銅鐸14個、銅戈7個がまとまって出土した。弥生時代中期に製作されたもので、複数埋納されていた例は少なく、弥生時代の祭祀を考えるうえでとても貴重な資料である。特徴的な絵画銅鐸である4号及び5号銅鐸には、昆虫や動物、人などが描かれており、人々の生活の様子や精神世界が伺える。この他にも、東灘区の北青木遺跡と本山遺跡では、発掘調査によって銅鐸が発見されており、埋納の状況がわかる貴重な資料となっている。

※1 マツリなどに使用されたと考えられる青銅製の釣鐘型の鐘 ※2 戈と呼ばれる武器の形をした青銅器



図29 戒町遺跡で検出された水田遺構



図30 頭高山遺跡集落復元CG

3-3 古墳時代

【古墳の出現】

3世紀後半になると、奈良県桜井市の^{はしほかこふん}箸墓古墳に代表されるような大型の古墳が造られ始め、規格の整った古墳がヤマト王権の影響下にあることを示すように各地に築かれた。

神戸市内では、3世紀後半の築造と考えられる灘区の^{にしもとめづかこふん}西求女塚古墳が古墳時代前期前半のもので、前方後方墳である。^{さんかくぶちしんじゅうきょう}三角縁神獣鏡※1 7面をはじめとした副葬品は、ヤマト王権との深い関わりを示している。同じく前方後方墳で東灘区の^{おとめづかこふん}処女塚古墳、前方後円墳で東灘区の^{ひがしもとめづかこふん}東求女塚古墳、へボソ塚古墳と3世紀後半から4世紀前半にかけて、東灘区から灘区に次々と大型の古墳が築かれており、ヤマト王権にとって重要な地域であったと想定できる。

六甲山系南麓地域西部では、兵庫区の^{ゆめのまるやまこふん}夢野丸山古墳、^{えげやまにほんまつこふん}会下山二本松古墳、^{とくのうざんこふん}須磨区の得能山古墳などが4世紀代の築造と考えられる。また、明石川流域では、西区の^{しらみずひさごづかこふん}白水瓢塚古墳が4世紀初頭の前方後円墳で、^{がもんたいしんじゅうきょう}画文帯神獣鏡※2や^{しゃりんせき}車輪石※3、^{いしくしろ}石釧※4などの副葬品が出土している。北区の^{しおたきたやまひがしこふん}塩田北山東古墳では、^{さんかくぶちじゅうもんたいいちぶつさんしんしじゅうきょう}三角縁獣文帯一仏三神四獣鏡という仏像をモチーフとした青銅鏡が出土している。全国でも9例しか知られていない特異なものである。

※1 鏡裏面に中国思想に基づく仙人や獣の文様が鋳出され、縁の断面が三角形の青銅製の鏡

※2 鏡裏面に中国思想に基づく仙人や獣の文様が鋳出され、縁に獣などを描いた画文帯を巡らす青銅製の鏡

※3・4 貝の形をモチーフにした石製の腕輪

【巨大古墳の時代】

4世紀後半から5世紀代には、奈良県の^{さきこふんぐん}佐紀古墳群や大阪府の^{もず}百舌鳥・^{ふるいちこふんぐん}古市古墳群にみられるような200mを超える大型の前方後円墳が造られるようになる。同時期に、神戸市域では全長194mを測る^{ごしきづかこふん}兵庫県下最大規模の古墳である垂水区の五色塚古墳が築造される。築造時期は4世紀後半と考えられ、この地域に突如として現れる大型の前方後円墳であることから、王権による何らかの政治的な情勢を反映していると見られる。また、瀬戸内海と淡路島を望む立地から、海上交通との関連も想定されるところである。しかし、五色塚古墳以後、同規模の大型前方後円墳は存在しない。

5世紀前半の前方後円墳としては、^{りょうぼさんこうち}陵墓参考地※1である西区の^{よしだおうづかこふん}吉田王塚古墳が知られている。

※1 被葬者を特定できないが、陵墓の可能性のあるもの

【変質する古墳】

5世紀後半から6世紀代には、全国各地で群集墳が確認されるようになる。神戸市では東灘区の^{すみよしみやまちいせき}住吉宮町遺跡で、5世紀初頭から造営が始まり、これまでの発掘調査で約70基の古墳が見つかる。この他にも北区の^{なかのこふんぐん}中野古墳群、^{みなみんじよこふんぐん}南所古墳群、^{いなりじんじやうらやまこふんぐん}稲荷神社裏山古墳群、^{あまがさきがくえんこふんぐん}尼崎学園古墳群、垂水区の^{まいこふんぐん}舞子古墳群、^{たかつかやまこふんぐん}高塚山古墳群、西区の^{てんのうざんこふんぐん}天王山古墳群、^{なかむらこふんぐん}中村古墳群、^{であいこふんぐん}出合古墳群などがあり、全国的な動向と同じく、多くの古墳が築造された。

上記の古墳群のほかにも6世紀から7世紀の古墳として、垂水区の^{かりぐちだい}狩口台^{つかこふん}きつね塚古墳、中央区の^{なかみやこがねづかこふん}中宮黄金塚古墳、灘区の^{おにづかこふん}鬼塚古墳、東灘区の^{いこまこふん}生駒古墳などが現在市街地に残っている。中でも狩口台きつね塚古墳は、二重濠を有しており、首長墳と考えられている。7世紀の飛鳥時代以降、権威の象徴としての古墳の役割は徐々に終わることとなる。

【古墳時代の生活】

市内には古墳だけではなく、古墳時代の人々の生活の痕跡も発掘調査で明らかになってきている。平面形が隅丸方形の竪穴建物と、掘立柱建物からなる集落は市内各地で確認される。古墳時代後期以降には竪穴建物には、カマドが取り付けられ、須恵器^{すえき}※₁や土師器^{はじき}※₂が出土する。カマドや須恵器などは、朝鮮半島からの渡来人によって5世紀頃にもたらされた生活様式と考えられ、各地に広まっていく。西区の出合遺跡では5世紀初頭と考えられる陶質土器^{たうし}※₃を焼成した窯跡の存在が知られ、東灘区の郡家遺跡^{ぐんげいせき}では、朝鮮半島の土器の影響を受けた韓式土器^{かんしきけい}が出土している。人々の交流が広く行われていたことが窺える。

西区の新方遺跡では、5世紀末以降の玉製品の工房跡が見つまっている。勾玉^{まがたま}※₄や管玉^{くだたま}※₅の製作を行っていたとみられ、原石から製品に至る各段階の遺物が出土している。

長田区^{まつのいせき}の松野遺跡では、6世紀初頭の豪族居館^{むなもちぼら}※₆の一部と考えられる遺構が確認された。棟持柱^{むなもちばしら}※₇を持つ掘立柱建物^{ほりたて}※₈と竪穴建物を溝や柵列で囲った遺構で、全国的にも類例の少ない貴重な遺構である。

- ※1 窯を使って高温で焼かれた青灰色で硬質の日本で作られたやきもの
- ※2 野焼きの茶褐色で軟質のやきもの
- ※3 窯を使って高温で焼かれた朝鮮半島系の青灰色で硬質のやきもの
- ※4 C字形をした石製のアクセサリー
- ※5 筒状の石製のアクセサリー
- ※6 地域の有力者の館
- ※7 屋根の棟木を支える柱
- ※8 地面に穴を掘り、礎石を使わずに柱を立てて造る建物



図31 五色塚古墳の全景(左)と出土品(右)



図32 現在の西求女塚古墳の全景(左)と出土品(右)

3-4 古代

6世紀以降、東アジア情勢の動乱の中で、日本列島においても律令制に基づく国家制度の構築を目指すこととなった。畿内^{きない}※₁・七道^{しちどう}※₂の行政区の基に国・郡・里^{こく・ぐん・り}が設けられ、中央集権化が進められた。

6世紀半ばにもたらされた仏教も社会に大きな変化を与えることとなる。

神戸市域は、古代摂津国と播磨国に位置する。現在の須磨区一の谷町から垂水区塩屋町にかけての海岸線が、畿内の西の境界とされる「赤しの櫛淵」^{あかし くしづち}に想定され、摂津国と播磨国の境もこの辺りと考えられる。畿内に位置する摂津国は、難波を中心とした摂津職^{なになわ}※3の段階から都の玄関口として重要視され、高位の官人が配置されている。また、播磨国も畿内に接する地域としての役割を重視されていたとみられ、^{たいこく}大国としての位置づけであった。10世紀前半に作成された『倭名類聚抄』^{わみょうるいじゅうしょう}によると、神戸市域は摂津国菟原郡、八部郡、有馬郡、播磨国明石郡、美囊郡が記載されている。

※1 現在の京都府・大阪府・奈良県を中心とした5つの国 ※2 山陽道など7つの道によって区分された行政区

※3 難波官を管轄し、摂津国の行政も司った官職

【公的な施設】

各郡には郡衙^{ぐんが}と呼ばれる役所が置かれ、発掘調査により場所が推定できるものもある。東灘区の郡家遺跡では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物跡が確認され、「郡家」という地名や周辺の小字名などから菟原郡衙跡ではないかと考えられている。その東に隣接する東灘区の住吉宮町遺跡では、「橘東家」「免」と墨書された土器が出土している。「免」は菟原郡の「菟」の一部ともみられ、郡家遺跡とともに郡衙との関連が想定できる。

兵庫区と長田区にまたがる上沢遺跡では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物、井戸、硯、帯金具などの官衙に関わる遺構、遺物が確認されている。井戸から出土した銅鏡はほぼ完形品で、官衙だけではなく、寺院との関連も想定される。長田区の御蔵遺跡^{みくらいせき}でも、掘立柱建物、赤色顔料の痕跡のある軒平瓦、帯金具、硯などが確認されている。これらの遺跡は『延喜式』^{えんぎしき}記載の八部郡、もしくはその前身とされる雄伴郡^{おともぐん}に関連すると考えられるが、菟原郡も含めた六甲山系南麓地域の郡の変遷は複雑で、須磨区の大田町遺跡^{おおたちょういせき}からは、文献史料には記載のない「荒田郡」^{あらたぐん}と刻書された硯が出土した。

西区の吉田南遺跡^{よしだみなみいせき}は、播磨国明石郡の郡衙と考えられている。掘立柱建物が整然と並び、木簡や墨書土器、円面硯^{えんめんけん}※1、帯金具などが出土した。木簡には「播磨国 播磨国司移 摂津職」と書かれているものもある。

北区の宅原遺跡^{えいばらいせき}では「評」と墨書された7世紀後半の土器が見つかっている。郡制成立前の播磨国有馬郡の前身となる官衙遺跡と考えられる。この他にも「五十戸」と書かれた墨書土器、祭祀に使用された人面墨書土器などが出土している。

山陽道沿いに設置された駅家^{うまや}※2と考えられる遺跡も確認されている。東灘区の深江北町遺跡では、「驛」と書かれた墨書土器が20点以上、「蘆屋駅長」などに宛てた木簡などが出土している。古代山陽道のルートについては諸説あるが、深江北町遺跡出土のこれらの遺物から『延喜式』^{えんぎしき}にみえる葦屋駅家^{あしやのうまや}の位置を示しているといえよう。このほか、須磨区の大田町遺跡は須磨駅家^{すまのうまや}と想定されている。

※1 上部の平坦面が硯面となっている円形の硯 ※2 駅路（七道）の沿線に一定の間隔で設置された交通管理施設

【古代寺院】

神戸市域における古代寺院の様相は、あまりよくわかっていない。長田区の室内遺跡^{むろうちいせき}では、奈良時代から平安時代の軒瓦^{のきがわら}が採集され、「房王寺」「堂ノ前」などの地名から寺院跡ではないかと考えられている。近接する上沢遺跡出土の銅鏡^{かみさわいせき}も寺院関連と想定することもできる。西区の白水遺跡^{しらみずいせき}では、平安時代中期の梵鐘^{ぼんしょう}鑄造遺構^{ちゆうぞういこう}※1が確認された。付近の字名は「延命寺」であることから寺院の存在

が考えられる。このほか、灘区の滝ノ奥経塚など平安時代末期の末法思想の影響を受け造営された経塚※2が市内各所で確認されている。

『延喜式』に記載された式内社しきないしゃは、各郡に多数挙げられている。先述した郡衙と同様に、律令制による枠組みの中で、地方の神事を司る役割があった。『延喜式』以前の様相は判然としないが、水上交通との関係から読み取れるものもある。

※1 寺院などの鐘を造った痕跡 ※2 仏教の経典を後世に残すため、銅製の筒などに経典を納め土中に埋めたもの

【水上交通】

『古事記』『日本書紀』にみえるいわゆる神功皇后じんぐうこうごうでんしゅう伝承では、瀬戸内海、大阪湾沿岸地域の港や祭神との関わりとみられる「広田いくたながお」、「活田長峽いくたながお」、「長田」などの名称が出てくる。神功皇后伝承はこの地域に多く分布しており、神功皇后が姿を映した泉とされる沢の井はその一つである。灘区の敏馬神社みぬめじんじゃは、『万葉集』に「敏売浦」や「敏売埼」と歌われる沿岸航路上の港と海洋祭祀の場であった可能性がある。また、難波とともに外交使節が畿内に入つての“もてなし”の場としても重視されていた。8世紀には大輪田泊おほろでなふりが行基ぎょうきによって瀬戸内海航路の重要な港の一つとして整備され、神戸市域の沿岸部が重要な水上交通路として続いていくこととなる。



図 33 吉田南遺跡で検出された建物群



図 34 長田神社

3-5 中世

【平氏の発展と源平合戦】

西区の神出窯跡群かんでようせきぐんからは、平安時代後期から鎌倉時代前期の須恵器すえきの窯跡かまあとが数十基発見されている。主な生産品の須恵器、瓦などは、平安京のみならず西日本各地から出土しており、播磨国の主要産業の一つであった。平安時代末期に台頭した平氏は、この播磨国を経済基盤の一つとしており、平忠盛たいらのただもりやその子清盛はりまのかみは播磨守に任じられている。

清盛は、都の玄関口と言える摂津国の西部に位置する福原に雪見御所ゆきみのごしよと呼ばれる別荘を構え、大輪田泊を拠点とした日宋貿易に力を入れた。兵庫区ぎおんいせきの祇園遺跡、中央区えんちの楠・荒田町遺跡からは、園池や建物跡、中国製の陶磁器が発見されており、この地に平氏の拠点があつたと考えられている。また、清盛は兵庫の福原で千僧供養せんそうくよう※1を催し、丹生山明要寺たんじょうさんみょうようじに日吉山王権現ひえさんのうごんげんを勧請するなど、宗教面でも活発に活動した。さらに、治承4年(1180)6月には安徳天皇らを福原に遷す福原遷都を行つたが、僅か5か月で再び平安京へ還都したとされる。その後、平氏は生田から須磨を中心とした範囲で戦闘が行われた生田森・一の谷合戦で、多くの犠牲者を出しながら敗走することとなった。後世の人々は犠牲者を悼み、腕塚や胴塚などの供養塔や塚を築いた。これらの一部は、現在に至るまで各所に残されており、地域の住民によって手厚く敬われている。

※1 千人の僧侶を招いて食を供し、法会を営むこと

【日明貿易と発展する兵庫津】

鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇ごだいごてんのうは新しい体制の下統治を行ったが、足利尊氏あしかがたかうじらが離反し、神戸では湊川などで激しい戦闘が繰り広げられた。当時の政治の中心である畿内と地方の境界であった六甲山系南麓地域全体が戦場と化したのは必然であったと言える。現在、湊川の戦いで戦死した楠木正成くすのきまさしげは「楠公なんこうさん」として市民に親しまれ、正成を祀った湊川神社内の墓碑は国指定史跡となっている。

室町幕府の守護体制下では、当初摂津及び播磨の守護職である赤松氏により、現在の市域内は統治されていた。また、日明貿易に注力した三代将軍足利義満により、外交使節を迎える場とされた兵庫津が再び繁栄期を迎えた。この頃から、興福寺が南関を、東大寺が北関を支配するようになり、文安2年(1445)の『兵庫北関入船納帳ひょうごきたせきいりふねのうちょう』の記述事項から、兵庫には年間5000隻ほどの船舶が入港していたと推定されている。しかし、応仁・文明の乱で再び焼亡し、国際港として役割は、堺へと移った。その後、安土桃山時代には西国攻めや朝鮮出兵などの兵站港へいたんこう※1として整備されていくことになる。

※1 前線に軍需品や食料などを送る、戦争の後方支援のための港

【神戸における中世仏教文化の発展】

平氏の滅亡によって荒廃した大輪田泊は、東大寺の重源ちゅうげんによって修築されて以降、東大寺支配の下、兵庫北関ひょうごきたせきが設けられ、津料つりょう※1の徴収が行われた。交通の要衝であった兵庫津には、律宗えいそんの叡尊や浄土宗の法然ほうねんなど、多くの宗教者が布教に訪れた。時宗の祖である一遍いっぺんは兵庫の観音堂で入滅にゅうめつしたといわれ、真光寺しんこうじには廟所びょうじょ※2が設けられている。

兵庫津が興亡を繰り返す一方で、西区や北区を中心に、被災を免れた多くの中世建築が現存している。寺院建築では、市内唯一の国宝建造物である太山寺本堂をはじめ、如意寺三重塔、南僧尾観音堂など多様な建築様式がみられる。そのほかにも、石峯寺しゃくぶじ、性海寺しょうかいじ、近江寺きんこうじなど、中世以来の寺院が存在している。これらの寺院の中には現在まで仏像などの文化財を伝えているだけでなく、主に昭和49年(1974)に、文化環境保存区域に指定され、現在も周辺の景観と調和した良好な環境が保たれている場所になっているものもある。

※1 津(港)の使用料 ※2 墓所



図 35 大輪田泊復元 CG



図 36 石峯寺

3-6 近世

【戦乱と天下統一】

永禄11年(1568)、織田信長によって摂津国も制圧され、和田惟政わだこれまさが配された。惟政の死後、荒木村重あらかむらしげが天正6年(1578)に信長に対して反乱を起こすと、一族の荒木元清は反乱に加勢した一向一揆とともに

に、兵庫津の防衛拠点として築城された花熊城はなくまじょうに立てこもり、天正8年(1580)まで抵抗を続けた。落城後は、池田恒興いけだつねおきによって花熊城の部材を用いて兵庫城が築かれた。この兵庫城をはじめとして、北区の松原城まつばらじょうや西区の端谷城はしたにじょうが近年発掘調査され、戦国時代の城郭の実態に迫る資料が発見されている。

信長の死後、後継者となった羽柴秀吉は、天正11年(1583)に甥の三好秀次に兵庫を与え、天正13年(1585)閏8月に直轄領とした。また、秀吉は、三木城攻略時からたびたび有馬湯山を訪れ、天下統一を果たした天正18年(1590)10月には、有馬茶会と称される大規模な茶会を催している。

文禄5年(1596)閏7月に発生した慶長伏見地震は、畿内に甚大な被害を及ぼし、福祥寺(須磨寺)の『当山歴代』とうざんれきだいに詳細な記録が残るだけでなく、西求女塚古墳などの遺跡にも痕跡が確認できる。また、秀吉の湯山御殿ゆのやまごてんは、この地震を契機に噴出した泉源に建てられた。



図 37 地震により崩壊した西求女塚古墳の石室



図 38 発掘された兵庫城跡

【交通と文化の発展】

市域内には、西国街道と呼ばれる主街道が西宮から灘、兵庫、須磨を経由し、明石へ向かう浜側に通っていた。そしてその脇往還わきおうかん※1として宝塚のこはま小浜、西宮のなまぜ生瀬から有馬、淡河を経由し、三木へ向かう山側(湯山街道)が整備された。浜側の兵庫では、岡方おかがたと呼ばれる自治組織が、この駅所を運営し、それらの記録は『岡方文書』として残されている。山側は、本陣の置かれた淡河をはじめ、有馬、道場川原どうじょうがわらが駅所として公認された。これらの街道をつなぐ峠越えの道もいくつか存在し、人や物資だけでなく、文化の広がりも促した。北区には国指定重要有形民俗文化財である下谷上の舞台をはじめ、江戸時代後期の歌舞伎舞台が現存し、農村部でも歌舞伎や人形浄瑠璃が盛んに行われていたことを伝えている。また、長田区の長田神社こしきついなしきの古式追儺式や須磨区の車大歳神社くるまおとしじんじやの翁舞おきなまいなどの伝統的な祭り・行事も現在に至るまで続いている。特に、鬼追い行事は市内西部の摂津国と播磨国の境界付近にある社寺に伝わっており、神戸市内にあっては特徴的である。

※1 山陽道などの五街道以外の主要な街道

【産業】

市内の名産としては、酒や菜種灯油せつつめいしよずえが『摂津名所図会』などから窺える。特に六甲山系南麓地域では、江戸時代中期から水車による絞油や製粉、精米など様々な産業が発展した。また、それに伴って、素麺業や灘五郷(魚崎・御影・西郷・西宮・今津)の酒造業が主要産業として成長していったのである。樽廻船たるかいせん※1を用いて江戸へ輸送された灘五郷の酒は、「下り酒」として称賛され、現代まで続く清酒の基礎となった。江戸時代当時の酒蔵は、阪神・淡路大震災により多くが倒壊したものの、沢の鶴や白鶴酒造など一部の酒蔵は、再建され酒造に関する資料館として震災前と同様に活用されている。

※1 主に上方の酒を大阪から江戸に運んでいた輸送船

【兵庫津の繁栄】

兵庫津では、河村瑞賢^{かわむらざいけん}による西廻り航路の開発後、廻船問屋^{かいせんどんや}が勃興し、江戸時代中期以降は北前船などの買積船が急増していった。高田屋嘉兵衛^{たかたやかへえ}が新たに北前船の択捉航路^{えとろふこうろ}を開拓するなど、兵庫津の商人たちは大坂商人と比肩するまでに成長した。これらの大商人の中には、江戸時代の初めから西国大名の米や特産品の販売を請け負い、参勤交代の際には邸宅を宿舎として提供した者もあり、岡方が運営する本陣^{ほんじん}に対して、浜本陣^{はまほんじん}と呼ばれた。この浜本陣には、慣例的に朝鮮通信使^{ちょうせんつうしんし}※1も滞在し、商人たちは使節の接待にあたった。さらに、商人の力が増すとともに町場も拡大し、その様子は兵庫津を描いた様々な絵図、そして発掘遺構からも読み取ることができる。

※1 将軍家に対して、朝鮮国王が国書や進物をもたらすために派遣した外交使節団

【幕末の海防】

こうして発展を遂げた市域内の沿岸部では、幕末の対外緊張の高まりにあわせて湊川台場^{みなとがわだいぼ}、和田岬砲台^{わだ}、明石藩舞子台場^{みさきほうだい}などの海防施設が築造されたほか、海軍操練所が勝海舟によって開かれた。さらに、神戸港が開国後は通商条約において横浜港などとともに開港地に定められ、明治時代以降の港湾都市へと展開していくこととなる。



図 39 伝豊太閤湯山御殿跡



図 40 敏馬神社弁才船絵馬（敏馬神社蔵）

3-7 近代（明治時代から第二次世界大戦前）

【居留地と外国文化】

政治的な紆余曲折を経て、慶応3年12月7日（1868年1月1日）に神戸港開港を迎えた。当初は、神戸事件など外国人との衝突もあったものの、開港を契機に様々な外国文化を取り入れつつ、神戸が国際港湾都市として新たな歩みを始めた。

外国人の居住・営業の場として神戸外国人居留地が造成され、多くの商館などの近代的な建造物が造られた。国指定重要文化財の旧神戸居留地十五番館は、当時の建造物の様子を今に伝えている。居留地の整備にあたったのは、英国人技師 J. W. ハートで、神戸に彼の計画図が3枚伝わっている。そこには整然とした区画、下水道やガス灯といったインフラなどが書き込まれている。当時の英字新聞には、「神戸はたしかに美しく、東洋における居留地として、もっともよく設計されている。」と称されるほどであった。現在、当時の区画が継承されているだけでなく、地中には当時の煉瓦造下水道も残されている。居留地では、米・茶・マッチなどの輸出品や綿布類・毛織物などの輸入品が交易品として取り扱われていた。特に茶については、近郊で栽培、製茶したものを居留地内で再加工しており、重要な輸出品の一つであった。また、明治時代に生産を開始したマッチも神戸港の主力産業となった。

居留地が開港当初建設中であったこともあり、居留外国人は周辺での雑居が認められていた。現在の国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている北野町山本通や、元町の南京町などの地域がそれにあたる。開港とともにやってきた外国人は、生活面や文化的な面でも大きな影響を与えた。西洋食や洋装や教育、そしてスポーツやレクリエーションなど多岐にわたる。レクリエーションに関する施設として、中央区の東遊園地や灘区の六甲山の別荘やゴルフ場などが挙げられる。海外からさまざまな人々がやってきたこともあり、キリスト教やイスラム教、中国の民間宗教など様々な宗教も神戸にもたらされた。

また、開港当時は神戸港の背山である六甲山がはげ山化していたため水害が多発しており、その対策として明治4年（1871）には生田川、明治30年（1897）には湊川の付け替え工事が行われ、さらに明治30年代には植林などの治山事業が始まった。

【周辺地域の状況】

一方で、神戸港開港まで港湾都市として栄えた兵庫港付近では、新川・兵庫運河の開削や湊川付け替えにより生み出された新開地しんかいちの開発が行われていた。貿易の中心は次第に神戸港へと移っていったが、新開地にはその後映画館や劇場などが次々に建設され、神戸市の一大歓楽街に成長し多くの人々が押し寄せた。聚楽館しゅうらくかんや神戸タワーなどの観光名所も建設され、「東の浅草・西の新開地」と呼ばれるほどの賑わいを見せた。

開港に伴う影響は、神戸港を中心とする海岸部だけではなく、近郊の農村部にも及んだ。西洋から安価な綿布が輸入されたため、現在の西区岩岡周辺の主要産業であった綿花栽培及び綿布生産が打撃を受けた。その対策として、稲作へ転換することを目的に北区の淡河川・山田川から疏水そすいを引いた。現在も各所で当時のため池ずいどうや隧道などを目にする事ができる。



図41 新開地の賑わい（出典：ヒョーゴアーカイブス）



図42 山田池堰堤

【近代神戸の発展と災害】

明治時代以降、神戸港は国際貿易港として重要な位置をしめ、日清・日露戦争や第一次世界大戦による好景気を背景に造船業・鉄鋼業・紡績業・ゴム工業・マッチ工業・貿易業などが発展し、六甲山系南麓地域の海岸部に多くの工場などが建設された。職を求めて神戸港周辺に労働力が集まり都市化は進んだ。明治7年（1874）には大阪神戸間に鉄道が開業し、それに続いて阪神電鉄や阪急電鉄などの民間の鉄道も開業し、宅地化が進んだ。また、六甲山系南麓地域はその立地から風光明媚な場所として認知されており、当時の実業家たちは広大な敷地を有した邸宅や別邸を住吉・御影、須磨から舞子までの海岸部に建築した。その一方で、かつての外国人居留地には大正時代から昭和時代初期にかけて銀行やオフィスビルなどの建造物が次々に造られた。また、神戸港は主にブラジル移民の出発港ともなっ

おり、日本各地から人が集まり旅立っていった。現在も移民に向かう人々が一時的に生活をした国立移民収容所が残されており、海外移住と文化の歴史を伝える場として活用されている。

このように神戸市は発展を続けてきたが、世界恐慌、米騒動など不景気による社会不安や、昭和 13 年（1938）に起こった阪神大水害、そして第二次世界大戦末期には、主に海岸部の造船所や軍需工場などの壊滅などを目的とした神戸大空襲があり、人的にも経済的にも打撃を受けた。この空襲で神戸市全域において様々なものが失われ、建造物や祭りなどの多数の文化財にも深刻な影響を与えた。



図 43 居留地計画図（神戸市立中央図書館蔵）



図 44 湊川隧道

3-8 現代（第二次世界大戦後～）

【第二次世界大戦】

第二次世界大戦敗戦後の都市部は、神戸大空襲により廃墟と化した。戦争から 80 年近く経過し、その記憶が薄れているが、市内各所に残る防空壕跡や、市内の発掘調査で発見される焼夷弾や爆弾、神戸市内に所蔵されている戦災資料、そして戦争の語り部がその様子を伝えている。

【市域の拡大】

神戸市は、敗戦後の都市計画を進める中で、「大神戸市」構想の一環として昭和 22 年（1947）から山田村や御影町など周辺の村を編入していった。その目的は、人口の分散、市街地の土地配分の適正化、都市部と農村部の交流を円滑にし、国際港湾都市として内容を充実させることにあった。そして昭和 33 年（1958）に淡河村を編入し、現在の神戸市域が形成された。一方で、神戸市の海岸部は平坦な土地が少なく、港湾や工業用地の確保が難しく、経済的発展には大変な足かせであった。昭和 28 年（1953）から昭和 45 年（1970）まで摩耶埠頭以東と兵庫から須磨の海岸部を、昭和 41 年（1966）から平成 8 年（1996）までポートアイランド・六甲アイランドの人工島を埋め立てにより造成した。この造成に伴う土砂は、後背山地である六甲山系や須磨区の丘陵地の造成土により賄った。いわゆる「山、海へ行く」と呼ばれた神戸方式の開発事業が展開された。これにより海上の土地が増えるだけでなく、山麓部や丘陵部に大規模な宅地を生み出した。土砂を運搬したベルトコンベアは現在も残されており、貴重な土木遺産と言える。開発の進展に伴い、遺跡が破壊される事例が増加し、遺跡の保存運動など埋蔵文化財保護に対する動きが活発になった。

【産業の変化】

鉄鋼業や造船業などの重工業、紡績業、貿易業が戦後復興を牽引していった。戦災により大きな被害を受けた灘の酒造業は、生活水準の向上とともに昭和 30 年代から生産量が増加した。神戸市の地場産

業の一つである真珠製品も輸出品として重要な位置を占めた。昭和 45 年（1970）以降の石油危機などの世界経済の激変に伴い、神戸市の主要産業が重工業から多角化に伴う新しい産業へと変革していった。

神戸市は、昭和 48 年（1973）には衣料や服飾だけではなく、酒造やケミカルシューズなどの地場産業を含めた概念として「ファッション都市」を宣言し、様々な産業を活かした観光なども展開された。さらに観光面では、テレビドラマ「風見鶏」の放送で始まった異人館ブームを契機に都市観光へと変化した。

【まちづくりの動向】

開発や経済的発展の一方で、工業化に伴い水質、大気の汚染、交通状況の悪化など神戸市民を取り巻く環境が変化していった。それを背景に総合的に環境を守る動きも見られるようになる。神戸市は 1970 年代に入り神戸市民の環境を守る条例を制定し、昭和 49 年（1974）にはそれらを反映した新・神戸市総合計画を策定した。さらに昭和 53 年（1978）には全国に先駆けて総合的な都市計画形成の仕組みづくりのための神戸市都市景観条例を制定した。その中で都市景観形成地域、美観地区、景観形成指定建築物等届出地域、そして伝統的建造物群保存地区の指定、それに伴う助成制度を定め、文化的、歴史的な景観を守る努力が図られるようになった。また、同時期に丸山地区や板宿地区などでは地域住民がまちづくりに参画し、影響を与える動きがみられる。そのような動きに呼応して昭和 56 年（1981）に「神戸市地区計画及びまちづくり協定等に関する条例」が制定され、市民参加型の手法が表わされ、神戸らしいまちづくりが進められた。

【阪神・淡路大震災】

平成 7 年（1995）1 月 17 日には、兵庫県南部地震が神戸市を襲った。震度 7 の都市直下型地震で、建物の倒壊や地震に起因した火災など広範囲に大きな被害を被った。人的な被害はもちろんのこと、経済に関する被害も著しいものがあつた。港湾設備が被災し、コンテナ取扱量が減少し、神戸市の産業への影響は大きかった。造船業やケミカルシューズなどは復旧が早かったが、鉄鋼業や酒造業は、製造施設の損壊が著しく、再建に時間がかかった。特に中小の酒造会社では再建することが叶わず、廃業したところも多かった。また、六甲山周辺は、昭和 31 年（1956）に瀬戸内海国立公園に編入されたことにより、新規の宅地開発が規制され、自然を保護しながら、それまでの施設を活用して観光や行事が行われるようになっていた。しかし、震災時には、ケーブルカーや道路などが損壊したため、しばらくは六甲山に行けないというイメージが広がり、六甲山観光に大きな打撃を受けた。

【震災復興】

神戸市は、震災復興の過程で経済のみに目を向けるのではなく、神戸市のもつ多様な文化が見直され、「デザイン都市・神戸」を掲げ、都市の活性化や市民のくらしの質の豊かさを実現する都市を目指した。その過程で新しい産業振興と少子高齢社会に対応した医療・福祉サービスの体制を構築することを目的として、新たに「医療産業都市構想」を打ち立て、ポートアイランドに先端医療に関する企業誘致などを行ない、震災後の産業開発のシンボリックな存在となっている。また、神戸ルミナリエ、フィルムツーリズム、ハイキングの再興、神戸ビエンナーレをはじめ六甲ミーツアートなどの芸術イベント、六甲山ゴルフ場などの近代化産業遺産を観光資源として活かすなど、様々な手段による地域の活性化を図っている。そして震災から 27 年が経過し、「選ばれるまち」を目指し、成長している。



図 45 ポートアイランド



図 46 震災メモリアルパーク

(出典：いずれも Feel KOBE (一財) 神戸観光局)

3-9 災害史

(1) 近世以前の主な災害

【中世以前】

発掘調査により縄文時代（垂水区垂水日向遺跡）、弥生時代（須磨区戎町遺跡、西区玉津田中遺跡）、古墳時代（東灘区住吉宮町遺跡）に大規模な洪水が発生したことが明らかになっている。

また、『日本三代実録』によると、貞観 10 年（868）に播磨国大地震（推定マグニチュード 7.1）が発生し、平安京にも被害を及ぼすほどの災害であった。その 19 年後の仁和 3 年（887）には、再び畿内一円に大地震が発生し、摂津国付近は大規模な津波に襲われた。この地震は、広範囲の揺れと津波があったことから、南海地震だったと考えられている。

大風や洪水・高潮などの風水害も度々発生しており、『続日本紀』や『播磨国風土記』などにその被害状況を確認することができる。



図 47 垂水日向遺跡で出土した流木

【中世】

承徳 3 年（1099）に南海地震が発生した記録がある。神戸市域の被害についての記録はないが、周辺地域の被害記録から津波などの災害はあったと推測される。次に記録されている南海地震は、正平 16 年（1361）である。『太平記』に難波浦の大津波に関する記載があり、神戸市域の沿岸部においても同様の被害があったと考えられる。これら 2 つの南海地震の間にも南海地震が発生していたと想定されており、南海地震は 100～150 年の周期で発生し、神戸市域に津波などの被害を与えていたようである。

南海地震以外の地震災害としては、応永 13 年（1406）の大地震がある。この地震に先立って、大洪水・大風の被害があったようで、『假名年代記』や『如意寺旧記』などに記載されている。

永正元年（1504）の水害では住吉川が氾濫し、観音林（東灘区住吉本町一丁目付近）にあったとされる慈明寺が跡形もなく流失したという伝承があり、「慈明寺流れ」と呼ばれている。永正 14 年（1517）には妙法寺川が氾濫し、当時板宿村に祀られていた鳴滝明神が流失したとされる。このように風水害は度々発生しており、文明 7 年（1475）や弘治 3 年（1557）には高潮による大規模な被害もあった。

【近世】

京阪神の広い範囲に被害を及ぼした文禄 5 年（慶長元年）（1596）の慶長伏見地震により、兵庫津は

壊滅に近い被害に見舞われたことが当時の記録や発掘調査で検出されている。福祥寺（須磨寺）の『当山歴代』には、この地震によって本堂や三重宝塔、権現堂が山とともに崩れ去ったという記録がある。灘区の西求女塚古墳はこの地震により主体部を含め崩れたことが近年の発掘調査により判明している。



図 48 『当山歴代』（福祥寺蔵）

安政元年（1854）には、遠州灘を震源とする安政東海地震（推定マグニチュード8.4）、その翌日に紀伊半島沖を震源とする安政南海地震（推定マグニチュード8.4）が発生し、太平洋側を中心に甚大な被害をもたらした。大阪市内の各所に安政大津波碑が建立されており、神戸市周辺においても津波などの大規模な被害があったと考えられる。平成21年（2008）に旧神戸外国人居留地遺跡の発掘調査において江戸時代の津波に起因する堆積が確認されており、この地震もしくは、江戸時代中期に起こった地震による津波の痕跡と考えられている。

（2）近代以降の主な災害

【風水害】

六甲山系の主な地質は脆く崩れやすい花崗岩であり、市街地のすぐ背後に山があることで河川の流れが急であるため、土砂災害が発生しやすい環境にある。そうした災害発生の危険性を有しているにも関わらず、明治時代以前から薪炭利用などを目的とした過剰な森林伐採が進められた。その結果、六甲山系は部分的にはげ山と化し、風水害に対して非常に弱い状況にあった。

台風に刺激された梅雨前線による集中豪雨を原因として発生した昭和13年（1938）の阪神大水害では、市内のほぼすべての河川が氾濫した。各地で土石流が発生したことで、都市機能の破壊など甚大な被害をもたらされた。被災後、内務省神戸土木出張所六甲砂防事務所（現、国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所）が設立され、以後六甲山系における砂防事業や六甲水系の河川改修は、国の直轄事業として行われている。市街地では、生田川の開渠化など河川改修が進められた。

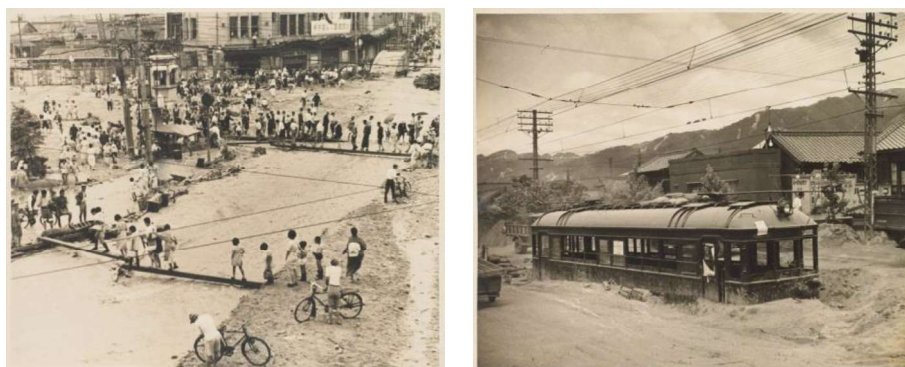


図 49 阪神大水害の様子（左：三宮交差点付近、右：都賀川（阪神国道））（神戸市立中央図書館蔵）

昭和36年（1961）6月に発生した集中豪雨では、山麓部の宅地造成地や傾斜地での被害が大きく、宅地造成等規制法の制定へとつながった。

昭和42年（1967）7月に発生した集中豪雨では、阪神大水害を上回る雨量であったにも関わらず、砂防事業や河川改修などの効果によって、被害は阪神大水害より小さく抑えられた。この成果がその

後、政令指定都市による河川改修制度の創設へとつながった。一方で、標高の高い山麓部での宅地開発が山腹崩壊や河川氾濫による大規模な被害を引き起こしたため、この災害を契機に急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律が制定されることとなった。



図 50 神戸市大水害スケッチ(神戸市立中央図書館蔵)
(阪神大水害：石屋川(高羽、鷹匠地区))



図 51 昭和 42 年水害(右：宇治川商店街)の様子
(出典：神戸市HP)

【戦災】

第二次世界大戦での本土空襲は昭和 19 年(1944)より本格化された。神戸市域では昭和 20 年(1945) 2月 4日に初めて行われ、その後 3月 17日、5月 11日、6月 5日の 3回の大空襲により神戸市は壊滅状態となった。

3月 17日の空襲では、現在の中央区東部・兵庫区・長田区を中心とする神戸市の西半分が壊滅した。5月 11日の空襲では、東灘区にあった航空機工場が目標とされ、東灘区・灘区が被害を受けた。6月 5日の空襲では、西宮市から垂水区までの広範囲が爆撃され、神戸市の東半分が焦土と化した。

戦後、昭和 21 年(1946)に「神戸市復興基本計画要綱」が策定されて、戦災復興事業として、最終的に 11 地区約 2,200ha の土地区画整理事業が施行された。本事業によって、浜手、中央、山手の 3大幹線、王子公園や須磨海浜公園など都市公園などが整備され、現在の都市基盤の骨格が形成された。



図 52 神戸空襲後の新開地周辺(左)と山手地区(右)(神戸新聞社提供)

【阪神・淡路大震災】

阪神・淡路大震災の原因となった兵庫県南部地震は、戦後日本で初めての大都市直下型地震であり、神戸市域では震度 6(東灘区から須磨区にかけて一部帯状に震度 7)の激震に襲われた。多くの死傷者や建造物の破壊といった甚大な被害となり、被災後はライフラインの寸断や市役所・病院などの重要公共施設の破損といった被害により都市機能は完全に麻痺した。被災時・復興期には、多くのボランティアや地域による復旧・復興活動、そして地域主体・市民協働による復興まちづくりが進められた。都

市基盤としては、平成7年（1995）に策定された「神戸市復興計画」に基づいて復興事業が進められ、現在の都市の姿となっている。慰霊の活動は現在も途絶えることなく実施されている。

震災は人的被害のみならず、文化財に対しても多くの被害をもたらした。北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区では、被災当時の伝統的建造物のほぼすべてがき損する被害があった。また、都市景観形成地域内にあっても、伝統的建造物に認定されていなかったフロインドリーブ邸（旧 M. J. シェー邸）など7邸は解体されることとなった。なお、フロインドリーブ邸は解体時の部材を用いて、北野物語館として平成13年（2001）に現在地に再建されている。旧居留地内では国指定重要文化財である旧神戸居留地十五番館が全壊したが、専門家など多くの協力を受けて完全に修復された。一方で灘五郷の酒蔵群が甚大な被害を受けるなど、神戸市内の歴史的風情を感じさせる景観資源であったが、当時指定文化財は少なく、多くの建造物が解体され、新しく建て替えられた。

当時文化財指定されていたものは、明治時代以前のもものがほとんどで、大正時代から昭和時代初期にかけて建築された未指定の建造物などは、部材の保存もされずに解体、処分されたものが多かった。多くの未指定文化財が失われたことは、文化財登録制度創設の契機の一つとなった。

自然災害により被災した文化財を緊急的に保全する民間による文化財レスキューが初めて組織されたのもこの震災であり、阪神・淡路大震災は文化財保護の大きな転換点となった。

復興にあたっては、まちづくりを進めるうえで地域コミュニティの再生が不可欠であった。地蔵盆やだんじりなどの伝統的な祭り・行事が重要な役割を占めていた事例や、埋蔵文化財の発掘調査成果を知ることで地域へのアイデンティティを深めた事例もあり、非常時における文化財の重要性が明らかになった。東日本大震災や熊本地震でも同様の例が報告されている。



図 53 阪神・淡路大震災の被災状況(左上：JR 新長田駅～鷹取駅付近、右上：魚崎南町5丁目櫻正宗周辺、左下：旧神戸居留地十五番館、中央下：神戸市立博物館（神戸市立博物館提供）、右下：市内埋蔵文化財収蔵施設）

表 13 近代以降の神戸市における主な災害履歴

発生年月日	災害名称	被害状況
昭和 13 年 (1938) 7 月 3～5 日	阪神大水害	死者 616 名、家屋倒壊流失 3,623 戸、埋没 854 戸、半壊 6,440 戸、床上浸水 22,940 戸、床下浸水 56,712 戸
昭和 20 年 (1945) 3 月 17 日、5 月 11 日、6 月 5 日他	神戸空襲	戦災家屋数 14 万 1,983 戸、総戦災者数は、罹災者 53 万 858 人、死者 7,491 人、負傷者 1 万 7,014 人、市街地面積約 60% (約 590 万坪) 焼失
昭和 36 年 (1961) 6 月 24～27 日	昭和 36 年水害	死者 32 名、行方不明 9 名、家屋倒壊流失 106 戸、半壊 132 戸、床上浸水 8,759 戸、床下浸水 60,524 戸
昭和 42 年 (1967) 7 月 9 日	昭和 42 年水害	死者 84 名、行方不明 8 名、家屋倒壊流失 361 戸、半壊 376 戸、床上浸水 7,759 戸、床下浸水 29,762 戸
平成 7 年 (1995) 1 月 17 日 (5 時 46 分)	阪神・淡路大震災 (兵庫県南部地震)	死亡者 4,571 人、不明 2 人、負傷者 14,678 人 (H12.1.11 日)、建造物損壊 (全壊 67,421 棟、半壊 55,145 棟 (H7.12.22))、建造物焼損 (全焼 6,965 棟、半焼 80 棟、部分焼 270 棟、ぼや 71 棟、延べ焼損面積 819,108 m ²)、避難所生活 (ピーク時: 箇所数 599 か所 (H7.1.26)、避難人数 236,899 人 (H7.1.24)、避難所就寝者数 222,127 人 (H7.1.18))